● 授業科目の
内容紹介

保育科専門教育科目

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
保育原理	**2**		**保**	**1**	**井上知香**

Ⅰ　主題

この授業では、幼児教育・保育を学ぶ上での基礎になる原理について学ぶ。

Ⅱ　授業の到達目標

1.保育の意義・保育の基本、内容と方法について理解する。
2.保育の思想と歴史的変遷について理解する。
3.保育の現状と課題について理解し、保育の課題を考察できる。

Ⅲ　授業の概要

保育の基本となる子ども理解・保育制度について自らの理解を深め、保育者としての在り方や今後の学び方について考える。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.「保育」とは何か	保育の基本的理念を理解する
2.保育対象としての子ども	「子ども」観について考える
3.なぜ「遊び」なのか	子どもにとっての遊びの重要性を理解する
4.保育の場	制度としての保育を学ぶ
5～7.保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の考え方	保育所、幼稚園、こども園の保育内容を理解する
8～9.保育のねらいと内容	保育内容について理解する
10～11.保育の思想史	保育制度の歴史、子ども観の変遷を理解する
12.保育実践の構成原理	保育の計画について理解する
13.保育と記録	記録をとる意味を理解する
14.保育の現状と課題	国内外国の保育の現状と課題について学ぶ
15.保育における地域連携	地域の子育て支援の役割について学ぶ

Ⅴ　使用テキスト・教材等

保育原理	神蔵幸子　宮川萬寿美　編著	青踏社	2015
幼稚園教育要領解説		文部科学省	
保育所保育指針解説書		厚生労働省	
幼保連携型認定こども園教育・保育要領		フレーベル館	

Ⅵ　参考書・参考資料

都度紹介する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80	10		10	
保育の意義の理解	○	○		○	
保育所保育指針の理解	○	○		○	
保育の内容と方法の理解	○	○		○	
保育の歴史及び思想史の理解	○	○		○	
保育の現状と課題の考察	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

テキストの該当箇所、配布資料、文献等をよく読んでおくこと

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業に主体的に参加すること

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
社会的養護		**2**	**保**	**1**	**渡井すみ子、種田賢二 村松隆之**

Ⅰ 主題
この授業では、社会的養護の意義と内容について学ぶ。

Ⅱ 授業の到達目標
1.社会的養護の意義と歴史的変遷について理解する
2.施設養護の実際について学び、職員の専門性について理解する
3.児童福祉施設の現状を学び、これからのあり方を考える

Ⅲ 授業の概要
教科書をもとにした講義を中心に、ビデオ、DVD、新聞記事等の資料を活用し理解を深める。

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1.児童を取り巻く環境と歴史的変遷	児童養護問題の今日的特徴、 日本における児童養護の展開
2～3.施設養護の実際	施設養護の基本原理
4～5.施設職員の専門性と課題	職員の資質と専門性、運営管理、 チームワークとスーパービジョン
6～11.児童福祉施設の現状と課題	保育所、児童家庭支援センター、児童館、乳児院、 児童養護施設、障害児関係施設、児童自立支援施設、 母子生活支援施設
12～15.社会的養護の展望	インクルージョン、親への支援、 地域子育て支援の今後の課題、里親、地域小規模施設、 施設運営、アフターケア
定期試験	筆記試験

Ⅴ 使用テキスト・教材等
基礎から学ぶ社会的養護　加藤孝正・小川英彦編著　ミネルヴァ書房

Ⅵ 参考書・参考資料
特になし

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	60	10		30	
児童を取り巻く環境と歴史的変遷	○	○		○	
施設養護の実際	○	○		○	
施設職員の専門性と課題	○	○		○	
児童福祉施設の現状と課題	○	○		○	
社会的養護の展望	○	○		○	

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）
子どもに関わる新聞記事をできる限り入手し、今起きている子どもの諸問題に対し、自分なりに検証できる問題意識を常に持ち授業に臨むこと。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）
保育福祉小六法を必ず携行すること。

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
保育の心理学Ⅰ		**2**	**保**	**1**	**大村壮**

Ⅰ　主題

この授業では、人の発達過程の基本的知識の習得が目的である。

Ⅱ　授業の到達目標

1.基本的な発達過程の知識を習得し、子どもの大よその発達を理解できるようになる。
2.どのような文脈や状況の中で子どもの成長が促されるのかを理解できるようになる。
3.保育者としてさまざまな時期の子どもや親を支援していく力をつける。

Ⅲ　授業の概要

講義を中心に授業を進めるが、子どもについてのDVDを視聴し、各々にその時期の子どもの発達的特徴について何かしらの発見をしてもらい、視聴後、それについて発表してもらう。また授業の最後には必ず授業についての考察や考えを問う小レポートを実施する。

Ⅳ　授業計画と内容

項　　目	内　　容
1.保育と心理学Ⅰ	発達とは何か？について考えていく
2.保育と心理学Ⅱ	子どもの発達を理解することの意義について
3.子どもの発達理解Ⅰ	子どもの発達とそのための環境について
4.子どもの発達理解Ⅱ	感情と自我の発達について
5.子どもの発達理解Ⅲ	身体機能と運動機能の発達について
6.子どもの発達理解Ⅳ	知覚と認知の発達について
7.子どもの発達理解Ⅴ	言葉と社会性の発達について
8.他者との関わりと発達Ⅰ	親との関わりについて
9.他者との関わりと発達Ⅱ	子ども同士の関わりについて
10.生涯発達過程Ⅰ	生涯発達と発達援助について
11.生涯発達過程Ⅱ	胎児期～新生児期について
12.生涯発達過程Ⅲ	幼児期～児童期への移行について
13.生涯発達過程Ⅳ	児童期～青年期への移行について
14.生涯発達過程Ⅴ	成人期、老年期について
15.まとめ	これまでの内容をまとめる

Ⅴ　使用テキスト・教材等

テキストは特に使用しない。

Ⅵ　参考書・参考資料

授業中に指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	90	10			
発達過程の理解	○	○			
発達を支える環境の理解	○	○			
発達援助の理解	○	○			

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

人間に興味をもち、子どものみならず、お年寄りまで含めて普段から観察していること。授業で配布するプリントをよく読んでおくこと。不明な点は積極的に質問すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

教室内の他の受講者に配慮した行動を求めます。そのため、他の受講者に迷惑となる行動は絶対にしないこと。注意に従わない場合、退席を命じます。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
保育の心理学Ⅱ		〔1〕	**保**	**1**	**金子泰之**

Ⅰ 主題
この授業では子どもの心身の発達過程と保育実践についての理解を深める。

Ⅱ 授業の到達目標
1.生活と遊びの中で学ぶ子どもの経験や学習の過程を説明できるようになる。
2.保育における発達支援を学び、子どもへの対応について考察できるようになる。
3.心理学の基礎的知識と技術を利用し、保育に応用できるようになる。

Ⅲ 授業の概要
子どもの発達過程について視聴覚教材を参考にしながら学び、子どもの生活と遊びの過程を学生自身の経験や新聞記事、雑誌、インターネットなどで知った情報を報告し合い、深める。

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1.子ども理解と発達の把握	子どもの行動の疑問について
2.個人差や発達に応じた保育	個人差の理解と保育のあり方
3.子ども集団と保育	子ども同士の関係と保育者の役割
4.子どもの生活と学び	子どもの生活とスクリプトの獲得
5.子どもの遊びと学び 1	遊びの意味と楽しさの追及
6.子どもの遊びと学び 2	遊びと象徴機能の発達
7.生きる力の基礎 1	ヒトとのかかわりの意味を考える
8.生きる力の基礎 2	活動の動機はいかに育つかを学ぶ
9.基本的生活習慣の獲得	自立する意味を学ぶ
10.基本的生活習慣の獲得と発達	手続き的知識の成立過程を学ぶ
11.自己の主体性の獲得と発達援助	自己意識の成立過程を学ぶ
12.発達課題に応じた援助や関わり	発達検査を理解する
13.就学への支援	発達の連続性と各期の特性を学ぶ
14.子どもの発達と保育の課題	現代社会の特徴を考える
15.まとめ	授業全体のまとめを行う

Ⅴ 使用テキスト・教材等
テキストは使用しない。

Ⅵ 参考書・参考資料
適宜、参考書を示す。

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（ ）
配点比率(%)　合計 100	90	10			
子どもの学習の過程を説明できる	○	○			
発達支援・発達援助の理解と考察	○	○			
心理学を保育に応用し子どもを理解する	○	○			

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）
配布資料をもとに，講義の大事なポイントをまとめ，復習してから授業に参加すること。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）
発表や話し合い等、授業への積極的な参加が必要である。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
子どもの保健Ⅰ		**4**	**保**	**1**	**岩崎美代子**

Ⅰ　主題
保育者に覚えておいてほしい知識やセルフコントロールの仕方を身につける

Ⅱ　授業の到達目標
1.子どもの身体と心の発達や疾病、事故について、基礎知識を学び深める
2.子どもを取り巻く社会環境の変化と対策を考える
3.セルフコントロールの仕方や、人間関係の築き方を学び深める

Ⅲ　授業の概要
日常生活や保育現場で、即日役に立つような講義にする

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1.2	「保健」とは？	意義と目的の確認する。
3.4	子どもの　発育・発達	成長とは何かを考える。
5.6	生理機能・運動機能の発達	発達とは何かを考える。
7.8	発育に影響を及ぼす要因や条件	何が発達を促し、阻害するかを学ぶ。
9　～13	子どもにとっての環境と生きる力	環境の意義を学ぶ。
14～15	地域における児童虐待防止	虐待の定義と組織的取り組みを学ぶ。
16	子どもの生活環境と健康	排泄・睡眠・清潔習慣などを学ぶ。
17～19	子どもの精神（こころ）の発達	発達障害・習癖異常など子どもの対人関係を学ぶ。
20.21	子どもの栄養	子どもの栄養の特徴と病態について学ぶ。
22	子どもの健康状態の評価	子どもの健康状態の観察法を学ぶ。
23	子どもにみられる症状と対処法	発熱・咳・下痢などの対処法や予防接種について学ぶ。
24.25	事故と安全対策	「安全」「安心」て何だろう。
26.27	子どもの病気の予防	病気の特徴や病気が及ぼす影響について学ぶ。
28.29	母子保健の現状	母子保健に対する行政の仕組みや取り組みについて学ぶ。
30	まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等
図解　子どもの保健Ⅰ　　服部右子・大森正英　　株式会社みらい　　2014

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　　合計 100	80	10		10	
感染症ほか疾患の理解	○			○	
社会環境の変化に対応する知識		○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
常に、新聞に目を通し、流行中の疾患など、子どもに関わる情報の収集にあたること

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
コミュニケーションを大事にしながら授業を進める
考える時間を多くとる

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
子どもの保健Ⅱ		**〔1〕**	**保**	**2**	**高橋伸江**

Ⅰ 主題

1. 子どもの健康を守ることや生活する上での健康問題をとらえ、保育者として必要な知識と技術について学ぶ。
2. 子どものいのちを育むことについて考察できる。

Ⅱ 授業の到達目標

1.子どもの健康を守ることや、病気の時の対応がわかる。
2.子どものいのちを育む大切さについて考えられる。
3.安全管理の知識を活用して緊急時の対応が習得できる。

Ⅲ 授業の概要

子どもの健康をを守るうえで必要な学習について、講義・演習・DVD の視聴やデスカッションを通して身につける。

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1.子どもといのち	いのちを守り未来につなぐ
2.保育における保健計画と活動	保健計画の作成と活用
3.子どもの発育	胎児の発育と影響する因子
4.子どもの発達	運動機能・精神機能の発達とその評価
5.子どもの健康状態	生理機能の発達
6.日常における養護①	子どもの抱き方　おんぶの仕方　口腔内の衛生　他(演習含)
7.日常における養護②	衣類の着脱の仕方　沐浴の仕方　寝かせ方　他(演習含)
8.子どもの保育環境	施設環境と日常の生活管理
9.よくかかる病気	病気の基礎知識と主な感染症
10.よく起こる事故	子どもの事故の特徴と安全管理
11.いざという時の応急処置	子どもの救急時や傷害時の応急処置
12.慢性疾患や障害を持つ子どもの保育	主な慢性疾患や障害を持つ子どもの保育と養護
13.子どもの生活環境	生活環境と生活習慣病
14.人の一生といのち	いのちを大切に育むこととは
15.まとめ	

Ⅴ 使用テキスト・教材等

子どもの保健演習ノート　榊原洋一・小林美由紀著　株式会社診断と治療社　2015
葉っぱのフレディ　ーいのちの旅ー　レオ・バスカーリア作　みらい　なな訳　童話屋

Ⅵ 参考書・参考資料

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小レポート	成果発表・作品	授業態度	演習
配点比率(%)　合計 100	70	10		10	10
健康保持と病気時の対応理解	○			○	
いのちを育むことの考察	○	○		○	
病気や救急時の対応と技術	○			○	○

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

子どもの保育に必要な情報について関心を寄せるとともに授業内容と照らし合わせ、人を育てることの意味を考えてほしい。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

授業内容の全てが保育者には必要であり、一つひとつを大切に学ぶことで実践に活かしていける。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
子どもの食と栄養		〔2〕	**保**	**2**	**森田久美子**

Ⅰ　主題

この授業では「栄養」と、「食」についての知識を学び、子どもに対する「食育」の実践力を身につける。

Ⅱ　授業の到達目標

1.「栄養」と「食」に対する理解を深め、自らの「食」を選択できるようになる。
2.保育現場での「食育」の基本、内容を学び、成長過程に合わせた保育支援を考察できる。
3.こころを育む食生活の営みを知り、子どもへの「食育」に応用できるようになる。

Ⅲ　授業の概要

「栄養と食」・「食育」をテーマに講義・演習を行い知識を学ぶ。グループ演習・調理実習等の体験を通して理解を深める。
また、1年間のプリント課題を積み重ね、自らの「子どもの食と栄養」ファイルを完成させる。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1　子どもの健康と食生活の意義・食育とは	子どもの食環境の現状と課題、食育とは
2～4　栄養に関する基礎知識	食生活の自己点検、栄養とは ヒトの体と食物・食物のゆくえ
5～13　子どもの発育発達と食生活 栄養に関する基礎知識	子どもの発育発達 乳汁栄養、調乳・離乳の意義・離乳食の進め方 離乳食調理実習 幼児期の食生活
14　まとめ	家庭および児童福祉施設における栄養と食生活
15　食育の基本と内容	作成食育媒体の発表
16　特別な配慮を要する子どもの食生活 疾病および体調不良の子どもへの対応	食物アレルギー・障害のある子への対応
17～30 食育の基本と内容	(講義・演習・調理実習) 朝食の意義・子どもと一緒に・ 幼児のお弁当 行事食・間食・5 歳児の 1 日献立作成・調理実習

Ⅴ　使用テキスト・教材等

子どもの食と栄養　　水野清子・南里清一郎　他　　診断と治療社
配布プリントファイル(講義・演習　・調理実習プリントを綴じる)

Ⅵ　参考書・参考資料

日本人の食事摂取基準 2015 年版　　第一出版

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他 (　　)
配点比率(%)　合計 100%	30	40	20	10	
栄養に関する基礎知識	○	○		○	
子どもの発育発達と食生活	○	○		○	
食育の基本と内容		○	○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

配布プリント課題に取り組み定期的に提出すること(成績評価方法の「小レポート、小テスト」に該当する)

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

履修上の注意：受講、課題提出等に意欲的であること。私語は慎む。
演習、調理実習については授業中に具体的な指示をする。特に、調理実習での身だしなみは、指示に従う事。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
音楽Ⅰ		**〔1〕**	**保**	**1**	**加藤明代、難波麻美**

Ⅰ　主題

保育現場において音楽活動を展開する上で必要な基礎的な知識や技能を習得する。

Ⅱ　授業の到達目標

1.音楽の基礎的な理論(楽典)を理解する。
2.簡単な伴奏付けの方法について理解する(三和音・コードネームの利用)。
3.声の技能を学び、しっかりと声を出して歌うことができる。

Ⅲ　授業の概要

基礎的な理論を、歌う・弾く・聴く等の活動を交えながら、理解できるよう進めていく。個と集団の活動を組み合わせた授業展開となる。

Ⅳ　授業計画と内容

理論項目	内容
1.オリエンテーション	授業の進め方　及び　機材の使用について
2.楽典1	譜表と音名
3.楽典2	音符と休符
4.楽典3	リズムと拍子
5.中間試験	筆記試験
6.楽典4	音程
7.楽典5	音階と調性(音階のしくみ)
8.楽典6	音階と調性(長音階について)
9.楽典7	音階と調性(短音階について)
10.楽典8	移調と転調
11.楽典9	主要三和音の基本形と転回形
12.楽典10	主要三和音と、その他の和音
13.楽典11	コードネーム
14.楽典12	伴奏付け
15.まとめ	復習
定期試験	筆記試験

歌　唱　　楽典と並行して毎時「子どもの歌」を数曲とりあげ、歌声の指導に活用していく。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

幼児音楽資料集　子どもの歌　　常葉大学短期大学部　幼児音楽研究会編
ミッキーといっしょ　はじめての楽典ブック　　長沼由美　他　　ヤマハミュージックメディア
ミッキーといっしょ　はじめての楽典ワークブック　　長沼由美　他　　ヤマハミュージックメディア

Ⅵ　参考書・参考資料

わかりやすい楽典　　川辺真　　音楽之友社
やさしくわかる楽典　　青島広志　　日本実業出版社

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	75	15		10	
音楽の基礎的な理論に対する理解	○	○		○	
伴奏付けの方法に対する理解	○	○		○	
歌う活動への意欲・実践				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

授業では「楽典ワークブック」は抜粋での扱いとなる。よって授業で行った内容は「楽典ワークブック」を活用し、復習することが望ましい。質問は随時受け付ける。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

学生の習得状況によって、扱う内容は前後する場合がある。使用教室(231教室)については、土足・飲食厳禁とする。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
音楽Ⅱ		〔1〕	**保**	**2**	**藤掛絢子**

Ⅰ　主題

乳幼児期の子どもの主体的な音楽的表現をみとり、理解するとともに、音への好奇心や興味関心をもとに音楽実践をデザインする方法について考える。

Ⅱ　授業の到達目標

1.生活や遊び場面における、子どもの音楽的表現や育ちをみとり、理解する力を身に付ける。
2.幼稚園や保育所等において、音楽遊びをデザインする力を習得する。
3.音を聴いたり、歌ったり、合奏したりすることを通して、協同で音楽を楽しみ、表現力を高める。

Ⅲ　授業の概要

乳幼児期の子どもたちは、生活や遊び、自然の中で、音をじっくりと聴いたり、身体の動きに合わせて歌ったり、お手合わせをしたりして楽しんでいる。この授業では、こうした子どもたちの主体的な音楽的表現について事例を通して学ぶとともに、子どもの音への興味関心を活かして音楽実践をデザインする方法について考える。また、楽器や歌唱、音遊びを通して、協同で音楽を楽しみ、保育現場で必要な知識や音楽表現力を身に付ける。

Ⅳ　授業計画と内容

	項目	内容
1	オリエンテーション	授業の進め方、機器の取り扱いについて、「表現」とは何か
2	子どもの音楽的発達	子どもの音楽的発達、表現について
3	わらべうた遊び①	わらべうたの特徴や種類、実際に身体を動かしてわらべうた遊び
4	わらべうた遊び②	わらべうた、手合わせ歌
5	音楽教育メソッド	ダルクローズ、コダーイなどの音楽教育メソッドについて
6	楽器と奏法①	幼稚園や保育所等で使われている楽器の奏法を学ぶ
7	楽器と奏法②	楽器を使った遊びの実践
8	楽器と奏法③	簡単な合奏法を学ぶ
9	楽器と奏法④	グループ発表
10	子どもと音のかかわり①	子どもを取りまく音・音環境
11	子どもと音のかかわり②	幼稚園や保育所等における音遊びの援助と環境構成
12	手作り楽器	身近なものを使った楽器づくり、楽器遊び
13	音楽遊びのデザイン①	音楽遊びの構想
14	音楽遊びのデザイン②	音楽遊びの実践とふりかえり
15	音楽遊びのデザイン③とまとめ	音楽遊びの実践とふりかえり、まとめ

Ⅴ　使用テキスト・教材等

なし。必要に応じて授業内にプリントを配布する。

Ⅵ　参考書・参考資料

プリント配布

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100		30	40	30	
乳幼児期の音楽的発達の理解		○	○	○	
楽器の基本的な演奏方法			○	○	
子どもの表現を育む音環境の理解		○	○	○	
音楽遊びに対する理解と援助		○	○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

課題としてレポートなどを課すことがある。
子どもの音楽的表現を育むためには、保育者自身が豊かな感性を持っていることが大切であるので、普段から、鳥や風などの自然の音、生活の中で聴こえる音に耳を澄ましてほしい。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

体調を整え、欠席しないようにすること。授業の中では、適宜子どもの歌や手遊びを取り入れる予定である。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
子どもの音楽		〔1〕	**保**	**1**	**藤掛絢子・森広樹**

Ⅰ 主題

子どもの発達にふさわしい音楽活動の援助や環境構成について学ぶ。また、自然の音や生活の中の音など、身近な音を「聴く」ことによって、音への豊かな感性や表現力を養うとともに、生活や遊び場面における子どもの音楽表現をみとる力を身につける。

Ⅱ 授業の到達目標

1.子どもの音楽表現をみとり、理解する力を身につける。
2.子どもの発達にふさわしい音楽活動の援助や、環境構成について考え、実践できる。
3.自然音や生活音など、身のまわりの音を聴き、作る活動を通して、豊かな感性や表現力を身につける。

Ⅲ 授業の概要

幼児期の子どもたちによる音楽表現は、歌唱や合奏にとどまらない。生活や遊びの中では、想像やイメージをふくらませながら音とかかわって楽しんでいる。この授業では、様々な音楽活動の方法を実践的に学び、子どもの発達にふさわしい援助や環境構成について考える。また、音さがし散歩やサウンドマップ作りなどを通して、自然音や身のまわりの音を聴き、音に対する感性や表現力を磨く。

Ⅳ 授業計画と内容

	項目	内容
1	オリエンテーション	授業の進め方、機器の取扱いについて、「表現」とは何か
2	子どもと音文化①	わらべうたの特徴や種類、実際に身体を動かして、わらべうた遊び
3	子どもと音文化②	わらべうた、手合わせ歌、手合わせ歌の創作
4	子どもの歌と伴奏①	子どもの歌を歌う、弾く
5	子どもの歌と伴奏②	コードについて学ぶ、子どもの歌を、コードネームを見ながら弾く
6	子どもの歌と伴奏③	コードを組み合わせて伴奏をつける
7	音を聴く、作る①	生活や自然の中の音を聴く、音さがし散歩
8	音を聴く、作る②	サウンドマップ（音の地図）作り、グループによる発表
9	音を聴く、作る③	さまざまな自然物や身のまわりのものを使った手作り楽器、グループによる発表
10	楽器にふれる	幼稚園や保育所等で使われている楽器の紹介、イメージを伴った表現について
11	絵本と音遊び	絵本に合う効果音の創作
12	楽器遊びと合奏①	楽器を使った遊びについて。簡単な合奏法を学ぶ
13	楽器遊びと合奏②	子どもの発達にふさわしい楽器遊びの援助、環境構成
14	楽器遊びと合奏③	グループによる発表と感想
15	まとめ	グループによる発表と感想、まとめ

Ⅴ 使用テキスト・教材等

『かんたんメソッド　コードで弾きうたい』　細田淳子　他　カワイ出版　2015

Ⅵ 参考書・参考資料

必要に応じて、授業内にプリントを配布する。

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　）
配点比率(%)　合計 100		10	60	30	
発達にふさわしい音楽活動への理解と実践		○	○	○	
子どもの表現を育む音環境への理解		○	○	○	
音楽活動を援助するための知識と技術の習得			○	○	
グループ活動への参加度				○	

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

授業外の学習として演習課題を課すことがある。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

使用教室（231教室）は土足及び飲食厳禁である。
精密機器が多くある教室のため、使用する際にはガイダンスに従うこと。
第７回授業「音さがし散歩」は、天候や場所の状態によって変更する場合がある。

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
ピアノ技法		〔2〕	**保**	**1**	**藤掛絢子**

Ⅰ　主題

保育者として必要な技能を身に付けるためのピアノの個人レッスンを行う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.保育者に必要とされるピアノの基礎的な技術の向上を目指す。
2.ピアノを通じて音楽の基礎的・基本的な知識を身に付ける。
3.弾き歌い等を通じて、保育現場に対応できる応用力を見に付ける。

Ⅲ　授業の概要

保育者として必要な技能を身に付けるため、学生個人の能力に応じたピアノのレッスンを行う。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1　ガイダンス	グループレッスン・個人レッスンのクラス分け
2～14　レッスン	各々の能力に応じたレッスン（個人またはグループ）
15　前期のまとめ	学生同士で聴き合い、お互いを高める
16～29　レッスン	各々の能力に応じたレッスン（個人またはグループ）
30　後期・一年のまとめ	一年のまとめとして、お互いに聴き合う

Ⅴ　使用テキスト・教材等

子どもの歌
担当教員と学生が相談の上、各々の進度に合わせて決定する。

Ⅵ　参考書・参考資料

各担当教員と相談する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100		50		50	
ピアノの基礎的・基本的な技術		○		○	
音楽の基礎的・基本的な知識		○		○	
子どもの歌のレパートリーを持つ		○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

① 美しい日本語を含んだ様々な曲を聴き、歌えること。
② 本来は原曲の楽譜使用が望ましいが、興味のある曲を見つけたら一種類の楽譜にとらわれず、自分に合ったレベルや編曲の楽譜を探すことを怠らないこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

前期・後期のまとめとして、それぞれ自由曲、弾き歌いを演奏する。（詳細は掲示等で）
また1年生終了時までに、バイエル教則本終了程度の技術・能力を備えることが望ましい。初心者はそれぞれ担当教員と相談し、1年生終了時までの目標を設定して、それを達成・越えていけるように努力すること。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
器楽（ピアノ）		〔2〕	**保**	**2**	**藤掛絢子**

Ⅰ　主題

1年次に習得したピアノの技法をさらに進め、保育者として必要な技能を身に付けるための個人ピアノレッスンを行う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.保育者に必要とされるピアノのさらなる技術の向上を目指す。
2.ピアノを通じて音楽のより基礎的・基本的な知識を身に付ける。
3.弾き歌い等を通じて、保育現場に対応できる応用力を見に付ける。

Ⅲ　授業の概要

学生個人の能力に応じ、1年次よりも発展したピアノのレッスンを行い、保育者に求められる技術・知識のさらなる充実を図る。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1	ガイダンス	個人レッスンのクラス分け
2～14	レッスン	各々の能力に応じたレッスン
15	前期のまとめ	学生同士で聴き合い、お互いを高める
16～29	レッスン	各々の能力に応じたレッスン
30	後期・一年のまとめ	一年のまとめとして、お互いに聴き合う

Ⅴ　使用テキスト・教材等

子どもの歌
担当教員と学生が相談の上、各々の進度に合わせて決定する。

Ⅵ　参考書・参考資料

各担当教員と相談する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　）
配点比率(%)　合計 100		50		50	
ピアノの技術向上		○		○	
音楽の基礎的・基本的な知識		○		○	
子どもの歌のレパートリーを持つ		○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

① 美しい日本語を含んだ様々な曲を聴くこと。
② 美しい日本語の発音、発声が出来る事。
③ 本来は原曲の楽譜使用が望ましいが、興味のある曲を見つけたら一種類の楽譜にとらわれず、自分に合ったレベルや編曲の楽譜を探すことを怠らないこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

前期・後期のまとめとして、それぞれ自由曲と子どもの歌を演奏する。
（詳細は掲示等で）

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
器楽（ギター）		〔2〕	**保**	**2**	**松本平行**

Ⅰ　主題

この授業では、アコースティック・ギターを用い、ギターの基礎知識や演奏技術を身に付ける。

Ⅱ　授業の到達目標

1.演奏法を理解し、伴奏が出来るようになる。
2.指板の音列について学び、運指について考察できる。
3.基本演奏の知識と技術を利用して、他曲の演奏に応用出来るようにする。

Ⅲ　授業の概要

この授業は、ストローク奏法やアルペジオ奏法を用い、歌の伴奏が出来るようにする。
この授業は各項目別に実践演習を行う。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.ギターの予備知識	ギター各部の名称、タブ譜の見方、チューニング方法
2.第1ポジションの音	Cdurの音階練習、左右のフォーム・ピッキングの仕方
3～7.コード練習	左指の押さえ方、ストローク奏法、コードチェンジ、 主要3和音によるストローク演習、マイナーコードについて
8～10.フィンガー・ピッキング	右指Pimaを用いた奏法、Gdurによる練習
11.8ビート・ストローク	8分音符で刻むストロークでの練習
12～14.ダウン・アップ・ストローク	アップ・ストロークを含む各種リズム演習 オープン・コードによるコードチェンジの実践練習
15～19.アルペジオ奏法	分散和音によるコード練習 ベース音の移動を伴うアルペジオ演習
20～22.シャッフル・リズム	3連符を基本リズムとしたストローク・アルペジオ演習
23～24.バレー・コード	バレー・コードを用いた練習、及びシンコペーション・ リズムによるストロークとアルペジオ演習
25～27.カッティングとミュート	リズムを歯切れ良く、ダイナミックに演奏するテクニック
28～29.16ビート・リズム	16 音符を単位とした演奏方法 同時にフィンガー・ピッキングでの奏法を学ぶ
30.まとめ	今まで学んだ演奏法を再度確認し、復習をする

必要に応じ音楽療法に準じた曲を実践演習する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

完全独習4週間で弾けるアコギ入門（CD・DVD）　谷口恵治　（株）ﾔﾏﾊﾐｭｰｼﾞｯｸﾒﾃﾞｨｱ

Ⅵ　参考書・参考資料

使用しない

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他(演奏技術)
配点比率(%)　合計 100%				30	70
ギターの知識及び技術				○	○

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

前回の授業の内容確認を必ず行う事。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

履修上の注意：使用するアコースティック・ギターは弦高、等の基本調整が完全な楽器でなければならない。
（クラシック・ギターでもよい。）

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
図画工作Ⅰ		〔1〕	**保**	**1**	**小倉　隆**

Ⅰ　主題

この授業では、身近な造形材料を用いて多様な活動を試みる。各々の演習を通して、造形活動の楽しさ、用具・材料の扱い方、保育者として必要な子どもの造形活動・表現を理解する。

Ⅱ　授業の到達目標

1.保育に必要な用具、材料の基礎知識・技能を身につけることができる。
2.興味をもって積極的に造形活動を試み、造形活動の楽しさを味わうことができる。
3.演習を振り返り、学びをまとめることができる。

Ⅲ　授業の概要

パス、粘土、絵の具それぞれに着目して、それらを用いた活動と表現を通して用具・材料の知識、理解を身につける。各々の活動と学びをファイルにまとめていく。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
1. オリエンテーション	授業の概要説明
2. 遊びと造形表現1(パス)	パスを用いて活動を試みる
3. 遊びと造形表現2(パス・エンピツ)	パス・エンピツを用いて活動を試みる
4. 遊びと造形表現3(コラージュ)	これまでの活動から発展した活動を試みる
5. 粘土の材料研究 1	土粘土を用いて活動を試みる 1
6. 粘土の材料研究 2	土粘土を用いて活動を試みる 2
7. 粘土の材料研究 3	土粘土を用いて活動を試みる 3
8. パスの材料研究(線)	線や色、模様あそびを試みる
9. パスの材料研究(形)	形や色、模様あそびを試みる
10. パスの材料研究(描く)	描画を試みる
11. 絵の具の材料研究 1	絵の具を用いた色染めを試みる
12. 絵の具の材料研究 2	絵の具を用いたスタンプを試みる
13. 絵の具の材料研究 3	これまでの活動から発展した活動を試みる
14. 演習のまとめ	各々の演習を振り返り、まとめる
15. 授業のまとめ 1	授業のまとめ 1

Ⅴ　使用テキスト・教材等

授業開始時に指示する。

Ⅵ　参考書・参考資料

使用しない。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他
配点比率(%)　合計 100		30	30	40	
かく表現についての知識や技能の習得		○	○	○	
つくる活動の知識や技能の習得		○	○	○	
造形遊びについての理解		○	○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

毎回の授業内容と学びをファイルにまとめること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業に必要な用具と材料は、各自が事前に準備する。

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
図画工作Ⅱ		〔1〕	**英保**	**2**	**小倉　隆**

Ⅰ　主題

この授業では、図画工作Ⅰで学んだ内容を発展させ、子どもの造形表現活動の支援に活かすことができるような知識・技能を演習を通して身につけるとともに、造形制作の楽しさと興味関心を深める。

Ⅱ　授業の到達目標

1.保育に必要な造形活動に楽しさと興味・関心を深めることができる。
2.自ら積極的に造形分野の教材研究を行うことができるようになる。
3.自ら取り組んだ教材研究を発表することができるようになる。

Ⅲ　授業の概要

保育に必要な造形分野の教材研究を広い視野で積極的に行い、自らの取り組みをまとめ紹介する。
材料;紙、折り紙、身辺材、パス、絵の具、フェルトペン、自然素材ほか。
観点;色、紙を折る(二つ折りほか)、切る、模様、点、線、形、空き箱・身辺材でつくる、つくって遊ぶ、絵を立たせて表すほか。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
1. オリエンテーション	授業の概要説明・取り組んでみたい教材研究を考える
2.　教材研究1	色水・色染め
3.　教材研究 2	色染めた紙でつくる
4.　教材研究 3	紙を折ってつくる・あそぶ制作に取り組む 1
5.　教材研究 4	紙を折ってつくる・あそぶ制作に取り組む 2
6.　教材研究 5	紙を折ってつくる・あそぶ制作に取り組む 3
7.　教材研究 6	空き箱・身辺材を使った工作に取り組む 1
8.　教材研究 7	空き箱・身辺材を使った工作に取り組む 2
9.　教材研究 8	興味ある教材研究に取り組む 1
10.教材研究 9	興味ある教材研究に取り組む 2
11.教材研究をまとめる 1	教材研究をまとめる 1
12.教材研究をまとめる 2	教材研究をまとめる 2
13.教材研究をまとめる 3	教材研究をまとめる 3
14.教材研究をまとめる 4	教材研究を紹介する
15. まとめ	授業のまとめと振り返り

Ⅴ　使用テキスト・教材等

テキストは使用しない。(必要な資料は配布する。)

Ⅵ　参考書・参考資料

幼稚園教育要領解説
保育所保育指針
幼保連携型認定こども園教育・保育要領

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他
配点比率(%)　合計 100		30	30	40	
造形活動と表現の関心		○	○	○	
教材研究に積極的に取り組む		○	○	○	
教材研究をまとめ紹介する		○	○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

レポートの提出に備え、各授業の内容を確実にまとめておく。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

指示された用具・材料は各自で準備する。

授業科目名	単位数		学科	年次	担当教員
	必修	選択			
子どもの造形		〔1〕	**保**	**1**	**小倉　隆**

Ⅰ　主題
保育士・幼稚園教諭に必要な子どもの造形活動・表現の理解と援助ができるようになる。

Ⅱ　授業の到達目標
1.子どもの造形活動と表現について理解できるようになる。
2.子どもの造形活動と援助のあり方を考えることができるようになる。
3.幼稚園教育要領解説と保育所保育指針の表現領域を確かめることができる。

Ⅲ　授業の概要
身辺材による多様な造形あそびを試み、子どもの造形活動と表現の援助のあり方・教材研究の取り組み方を習得する。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
1.オリエンテーション	授業説明・子どもの発達過程と造形表現を確かめる
2.教材研究(身辺材)1	新聞紙で造形あそび_活動の考察 1
3.教材研究(身辺材)2	新聞紙で造形あそび_活動の考察 2
4.教材研究(身辺材)3	新聞紙で伝承あそび_活動の考察 3
5.教材研究(身辺材)4	立体で造形あそび_活動の考察 1
6.教材研究(身辺材)5	立体で造形表現_活動の考察 2
7.教材研究(身辺材)6	紙の教材研究(切る・並べる)_活動と表現の考察
8.教材研究(身辺材)7	紙の教材研究(折る)_活動と表現の考察
9.教材研究(身辺材)8	紙の教材研究(組む)_活動と表現の考察
10.幼稚園教育要領の確認	造形活動と表現、援助のあり方を確かめる
11.共同制作を体験する 1	グループ制作の計画と実践
12.共同制作を体験する 2	グループ制作の実践
13.共同制作を体験する 3	グループ制作の実践と展示
14.授業のまとめ 1	授業各回を振り返る
15.授業のまとめ 2	授業全体のまとめ

Ⅴ　使用テキスト・教材等
幼稚園教育要領解説
保育所保育指針
認定こども園教育保育要領解説
必要な用具・材料は各自で準備すること。

Ⅵ　参考書・参考資料
必要な資料は配布する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%		30	30	40	
造形の理解・知識		○	○	○	
造形表現・遊びの理解		○	○	○	
造形支援のあり方の知識・理解		○	○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
・授業で使う材料・用具を事前に確かめ持参すること。
・レポートの提出に備え、各授業の内容を確実にまとめておくこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
授業に必要な用具と材料は各自が準備持参すること。忘れ物はマイナス評価する。

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
体育Ⅰ		〔1〕	**保**	**1**	**遠藤知里**

Ⅰ　主題

「動くこと」を通して得られる自分自身の心身調和と成長の実感を基礎として、幼児期の心身の調和と発達における身体を使ったあそび/身体表現の意味についての理解を深める。

Ⅱ　授業の到達目標

1.運動の楽しさや喜びを体感できる感性をひらき、身体に対する新たな認識を得る。
2.幼児の運動あそびの適切な援助法と安全管理法を身に付ける。
3.自らの体験を深め発展させる思考力を磨く。

Ⅲ　授業の概要

「体験する→ふりかえる(体験の意味理解/再構成)」が基本です。気づいたこと、わかったことを伝え合うことが大切です。いろいろなことを「仲間とともに」体験し、身体について新たな認識を得られるといいですね。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.オリエンテーション　仲間作りゲーム 1A.S.E.	関係の学習
2.仲間作りゲーム 2	A.S.E.　体験学習法
3.仲間作りゲーム 3(野外活動)	自然あそび／季節のあそび
4.「からだ」という自然に気づく 1	生命の進化とわたし
5.「からだ」という自然に気づく 2	深呼吸
6.「からだ」という自然に気づく 3	歩く　走る
7.「からだ」という自然に気づく 4	他者との調和
8.「からだ」という自然に気づく 5	いのちの旅　まとめ
9.講義	他者の経験から学ぶ
10.環境と身体 1	子どもの発達と身体表現
11.環境と身体 2	運動発達と遊びの展開
12.環境と身体 3	環境構成(少人数でのあそび)
13.環境と身体 4	環境構成(集団あそび)
14.環境と身体 5	あそびの伝承を考える
15.まとめ	まとめとふりかえり

Ⅴ　使用テキスト・教材等

幼児体育　　青野光子・松本典子編　　建帛社　　2011

Ⅵ　参考書・参考資料

授業で提示します。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表	授業態度	その他(貢献度)
配点比率(%)　合計 100		30	20	40	10
身体に対する認識力		○	○	○	○
運動の援助法と安全管理法		○	○	○	○
体験を深め発展させる思考力		○	○	○	○

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

授業ノートを作成し、学んだことのふりかえりを行いましょう。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

たくさん「動いて学ぶ」授業です。あなた自身と他の学生の安全のため、運動に適した服装、髪型で参加してください。(服装・髪型・心の姿勢が不適切な場合、授業への参加を認めない(=欠席扱い)ことがあります。)

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
体育Ⅱ		**〔1〕**	**保**	**2**	**鈴木雅裕**

Ⅰ 主題
幼児期の身体運動を科学的に分析し、安全に配慮した適切な援助方法を学ぶ。

Ⅱ 授業の到達目標
1.幼児期の身体運動の意義を理解し、遊びとして運動を展開できる。
2.身体運動を質的に捉えることを学び、運動時の動作を分析できる。
3.身体能力の個人差に応じた適切な援助能力を身に付けることができる。

Ⅲ 授業の概要
調整力の発達と関わりの深い基本動作に関する学習を中心に行い、幼児が身体運動を行う際の適切な指導および援助方法についてグループで考える。また、幼児を対象とした簡単な運動遊びを各自で考える。

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1. オリエンテーション	受講上の注意等
2. 幼児期の運動発達	運動発達の理解
3. 運動能力・体力・調整力	用語の定義および意義の理解
4. 基本動作	基本動作の意義および種類
5. 基本動作と運動発達	基本動作と運動発達の関係
6. 基本動作の評価	基本動作の評価方法
7. 運動としての「遊び」	身体運動の科学的理解
8. 運動強度と運動量	運動が身体に及ぼす影響
9. 動作の分析1	運動時の身体動作の理解
10. 動作の分析2	運動時の身体動作の理解
11. 小学校体育との関連1	小学校学習指導要領の理解
12. 小学校体育との関連2	体つくり運動等との関連の理解
13. 基本動作と運動遊び1	基本動作を取り入れた運動実践
14. 基本動作と運動遊び2	基本動作を取り入れた運動実践
15. 基本動作と運動遊び3	基本動作を取り入れた運動実践

Ⅴ 使用テキスト・教材等
テキストは使用しない。適宜プリント等を配布する。

Ⅵ 参考書・参考資料

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%) 合計 100%	30	10	10	50	
運動指導に必要な基本的知識の理解	○	○	○	○	
運動指導に必要な基本的技術の習得	○		○	○	
指導者としての資質	○	○	○	○	

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）
実際の運動場面を見て、その運動を言葉で説明できるように考える。
図書館にある関連資料を有効利用し、自主的に学習を進めることを期待する。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）
身体運動に適切な服装や用具を着用し、保育者として衛生および安全について十分に配慮し実践する。

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
体育Ⅱ		〔1〕	**保**	**2**	**田村元延**

Ⅰ　主題

幼児期の身体運動を科学的に分析し、安全に配慮した適切な援助方法を学ぶ。

Ⅱ　授業の到達目標

1.幼児期の身体運動の意義を理解し、遊びとして運動を展開できる。
2.身体運動を質的に捉えることを学び、運動時の動作を分析できる。
3.身体能力の個人差に応じた適切な援助能力を身に付けることができる。

Ⅲ　授業の概要

調整力の発達と関わりの深い基本動作に関する学習を中心に行い、幼児が身体運動を行う際の適切な指導および援助方法についてグループで考える。また、幼児を対象とした簡単な運動遊びを各自で考える。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. オリエンテーション	受講上の注意等
2. 幼児期の運動発達	運動発達の理解
3. 運動能力・体力・調整力	用語の定義および意義の理解
4. 基本動作	基本動作の意義および種類
5. 基本動作と運動発達	基本動作と運動発達の関係
6. 基本動作の評価	基本動作の評価方法
7. 運動としての「遊び」	身体運動の科学的理解
8. 運動強度と運動量	運動が身体に及ぼす影響
9. 動作の分析1	運動時の身体動作の理解
10. 動作の分析2	運動時の身体動作の理解
11. 小学校体育との関連1	小学校学習指導要領の理解
12. 小学校体育との関連2	体つくり運動等との関連の理解
13. 基本動作と運動遊び1	基本動作を取り入れた運動実践
14. 基本動作と運動遊び2	基本動作を取り入れた運動実践
15. 基本動作と運動遊び3	基本動作を取り入れた運動実践

Ⅴ　使用テキスト・教材等

テキストは使用しない。適宜プリント等を配布する。

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	30	10	10	50	
運動指導に必要な基本的知識の理解	○	○	○	○	
運動指導に必要な基本的技術の習得	○		○	○	
指導者としての資質	○	○	○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

実際の運動場面を見て、その運動を言葉で説明できるように考える。
図書館にある関連資料を有効利用し、自主的に学習を進めることを期待する。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

身体運動に適切な服装や用具を着用し、保育者として衛生および安全について十分に配慮し実践する。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
子どもの運動あそび		**〔1〕**	**保**	**1**	**田村元延**

Ⅰ 主題

多様な運動あそびを経験し、保育内容の 5 領域から運動あそびを捉えると共に、適切な援助方法を学ぶ。

Ⅱ 授業の到達目標

1.保育における運動あそびを理解するために保育内容の 5 領域を覚えることができる。（知識・理解）
2.多様な運動あそび経験から運動あそびを保育内容の 5 領域で捉えることができる。（思考・判断）
3.保育内容の 5 領域に基づいた運動あそびの援助計画を立て実践を行うことができる。（技能）

Ⅲ 授業の概要

授業は、「動いて学び、学んで動く」をテーマに①運動あそびの経験、②運動あそびを思考、③運動あそびの計画と実践という流れで展開していく。

Ⅳ 授業計画と内容

	項目	内容
1	オリエンテーション	本授業内容の説明
2	ボールを使ったあそび①	様々な用具・器具を使った運動あそびを経験する
3	ボールを使ったあそび②	〃
4	輪を使ったあそび	〃
5	縄を使ったあそび	〃
6	器具を使ったあそび	〃
7	運動あそびを考える	運動あそびを保育内容の 5 領域から思考する
8	運動あそび援助計画の作成①	運動あそびの援助計画及び実践を行う
9	運動あそび援助計画の作成②	〃
10	運動あそびの実践①	〃
11	運動あそびの実践②	〃
12	運動あそびの実践③	〃
13	運動あそびの実践④	〃
14	運動あそびの実践⑤	〃
15	まとめ	本授業のまとめを行う

Ⅴ 使用テキスト・教材等

幼児体育　　青野光子・松本典子編　　健帛社

Ⅵ 参考書・参考資料

特になし

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他(貢献度)
配点比率(%)　合計 100		10	40	40	10
運動あそびに関する基礎知識の習得		○			
運動あそびに関する基本的な計画及び実践能力の習得			○	○	○
保育者としての資質		○	○	○	○

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

たくさん動いて学ぶ授業です。運動に適した服装、髪型で参加してください。
（授業時の服装、髪型、授業に臨む姿勢が不適切な場合、授業への参加を認めません）

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
生活		**2**	**保**	**2**	**大坪弘典**

Ⅰ　主題

幼児教育と小学校教育をつなぐ生活科について、その意義やねらい、内容を理解する。

Ⅱ　授業の到達目標

1.小学校教育における生活科の位置づけやねらい、特徴について理解する。
2.生活科の具体的な活動内容について理解する。
3.生活科を通して、幼児教育と小学校教育とのつながりを理解する。

Ⅲ　授業の概要

平成の新教育として小学校教育に導入された生活科について、その意義や役割を知り、幼児教育との接続・連携のあり方を理解する。さらに、生活科の学習内容についての体験活動や授業案づくりを通して、生活科の活動内容を具体的・実践的に把握する。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.幼保・小の比較	幼児教育と小学校教育の相違点を調べる。
2.生活科誕生の背景	平成の新教育として生活科が誕生した歴史的背景を探る。
3.生活科の意義と目的	他教科の学習と比較しながら生活科の特徴を理解する。
4.体験学習の計画	栽培活動を通して生活科の理念を体得するための計画を立てる。
5.遊びと学び1	幼保と小学校での遊びの位置づけの違いを理解する。
6.遊びと学び2	遊びの中に見出せる学びや育ちについて分析する。
7.生活科の問題提起	生活科が小学校教育の中に何を求めているかを明らかにする。
8.学習指導要領1	生活科の教科としての目標を理解する。
9.学習指導要領2	生活科の内容構成について理解する。
10.生活科の授業分析	生活科の実践から実際の取り組みの在り様を知る。
11.生活科の指導計画1	単元構想について学ぶ。(目標、ねらい、活動内容、評価方法)
12.生活科の指導計画2	本時案の立て方について学ぶ。(教師の立ち位置と役割)
13.体験活動のまとめ1	自己の栽培活動について、記録の整理と振り返りをする。
14.体験活動のまとめ2	自己の栽培活動の取り組みを絵巻物等にして表現する。
15.これからの生活科	幼保小連携の視点から生活科の役割を確認する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

小学校学習指導要領解説　生活科　　文部科学省
幼児期から児童期への教育　　国立教育政策研究所　　平成 17

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	授業態度	その他
配点比率(%)　　合計 100					
生活科についての理解	○	○	○		
活動内容の理解	○	○	○		
幼児教育とのつながりについての理解	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

身近に見られる動植物などの自然や人々の営み・生活についての観察活動や、栽培等の体験活動。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

なし

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
子どもの文化と生活		**〔1〕**	**保**	**2**	**大坪弘典**

Ⅰ 主題

子どもをとりまく文化と生活について、主として「子どもの遊びの文化」と「言葉を使った保育文化」について考察するとともに、保育における実践力・活用力を培う。

Ⅱ 授業の到達目標

1.子どもの遊び文化の実態について考察し、様々な遊びについて調査・体験し、習得する。
2.言葉を使った保育実技について調べ、実践に供する技量を身に付ける。
3.お話劇場発表会で、自作の小道具を使って演じる。

Ⅲ 授業の概要

授業前半は子どもの遊び文化について、後半は言葉を使った保育実技について、保育の現場で実践・活用できることを目指した演習中心の活動に取り組む。

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1.子どもの遊び①	子どもの文化としての遊びと生活について理解する。
2.子どもの遊び②	自分たちはどれほどの遊びを経験し記憶しているか試してみる。
3.子どもの遊び③	子どもの遊びと遊び方の現状と課題を時代変化の中でとらえる。
4.子どもの遊び④	保育における遊びの意義を理解し、学びや育ちの視点からとらえる。
5.子どもの遊び⑤	遊びのレシピ作りを通して、遊び実技のレパートリーを増やす。
6.子どもの遊び⑥	遊びの伝承者を目指して、さまざまな伝承遊びを体験する。
7.言葉を使った保育①	言葉を使った保育実技の種類を知る。
8.言葉を使った保育②	「読み聞かせ」について、絵本や紙芝居を使って演習する。
9.言葉を使った保育③	ペープサート、パネルシアターなど「お話劇場」の特徴と楽しさを知る。
10.言葉を使った保育④	自分が演じるお話劇場のシナリオを作る。
11.言葉を使った保育⑤	お話劇場で使う小道具を作る①
12.言葉を使った保育⑥	お話劇場で使う小道具を作る②
13.言葉を使った保育⑦	仲間と相互に演じ方を見合い、アドバイスし合いながら練習する。
14.言葉を使った保育⑧	お話劇場発表会①
15.言葉を使った保育⑨	お話劇場発表会②

Ⅴ 使用テキスト・教材等

児童文化　小川清実　萌文書林　2010

Ⅵ 参考書・参考資料

授業で紹介

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他(　)
配点比率(%)　合計 100					
児童文化についての理解		○	○		
保育における児童文化への関心・考察		○		○	
児童文化財を活用した保育の実践		○	○	○	

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

普段から、子どもの生活や遊びの観察を心がけて行うこと。
遊びのレシピ作りやお話劇場の小道具づくりには、授業外の時間が必要となるので、期日に合わせて段取りを考え、計画的に取り組むこと。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
社会福祉	**2**		**保**	**1**	**加藤光良**

Ⅰ　主題

この授業では、保育士に必要な社会福祉の理念や制度の概要と課題について学ぶ。

Ⅱ　授業の到達目標

1.社会福祉の理念を理解する。
2.社会福祉の法律・制度・福祉サービスの体系を理解し、活用できるようにする。
3.社会福祉の動向を把握し、その変化への関心をもち、制度の理解に務める。

Ⅲ　授業の概要

社会福祉の法制度・サービスの体系等を理解し、その動向と課題について考察する。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1-2.私たちの生活と社会福祉	社会福祉の意義・理念を理解する
3.社会保険の種類と仕組み	社会保険の概要を理解する
4.児童福祉の制度	児童や子育てに対する社会的支援を学ぶ
5.母子、父子家庭への支援	母子家庭や父子家庭への社会的支援
6.障害児、者の自立支援	障がいを持つ人への福祉施策を学ぶ
7.高齢者への社会的支援	高齢者福祉施策を学ぶ
8.生活保護制度	生活困窮者の支援制度を学ぶ
9.地域福祉の制度	地域福祉の必要性と内容を学ぶ
10.社会福祉援助技術	社会福祉における相談援助技術の内容を学ぶ
11.社会福祉の実施機関	社会福祉サービスの実施機関、施設を学ぶ
12.社会福祉制度財政	社会福祉の財源について理解する
13.社会福祉の歴史	戦後の福祉の展開を理解する
14-15.社会福祉の動向と課題	社会福祉改革とこれからの方向を理解する
定期試験	筆記試験

Ⅴ　使用テキスト・教材等

新選　社会福祉第 2 版　　後藤卓郎編　　みらい　　2014
保育福祉六法 2016 年版　　みらい　　2015

Ⅵ　参考書・参考資料

授業内に適宜、紹介する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　　合計 100	70	20		10	
社会福祉の理念、制度の理解	○	○		○	
社会福祉の法律・制度・サービスの理解	○	○		○	
社会福祉の動向についての関心	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

テキストを事前に読んでおくこと。社会福祉に関するニュース新聞記事を読んで考察すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

毎時間、感想・質問を小レポートとして提出してもらう。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
相談援助		**〔1〕**	**保**	**2**	**鈴木久美子、加藤光良**

Ⅰ 主題

この授業では、保育者としての相談援助の概要、および方法と技術について学び、さらにロールプレイや事例分析を通じて対象への理解を深めていく。

Ⅱ 授業の到達目標

1.相談援助の概要を学び、それについて説明できる。
2.相談援助の方法と技術、具体的展開について理解し、応用できるようになる。
3.ソーシャルワークの応用と事例分析を通して、対象への理解を深めることができる。

Ⅲ 授業の概要

演習形態で進め、グループワーク等を積極的に実施し、意見交換をしたうえで、各人の考察を深める。

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1.保育者と相談援助	保育者が相談援助を学ぶ意義を知る
2.相談援助の概要（1）	相談援助の理論と意義や機能を学ぶ
3.相談援助の概要（2）	ソーシャルワークと相談援助について学ぶ
4.相談援助の概要（3）	保育とソーシャルワークについて学ぶ
5.相談援助の方法と技術（1）	相談援助の対象と過程を学ぶ
6～8.相談援助の方法と技術（2）	相談援助の技術とアプローチを学ぶ(ロールプレイ含む)
9. 相談援助の具体的展開（1）	計画・記録・評価について学ぶ
10.相談援助の具体的展開（2）	関係機関、多様な専門職との協働・連携について学ぶ
11.相談援助の具体的展開（3）	社会資源について学ぶ
12.事例分析(1)	虐待の予防と対応等
13.事例分析(2)	障害のある子どもとその保護者への支援等析
14.事例分析(3)	ロールプレイによる事例分析とまとめ
15.保育と相談援助	保育現場における相談援助の重要性をまとめる
定期試験	筆記試験

Ⅴ 使用テキスト・教材等

演習 保育と相談援助　前田敏雄編　みらい　2013

Ⅵ 参考書・参考資料

授業内に適宜、紹介する。

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　）
配点比率(%)　合計 100	50	25	25		
相談援助についての理解と考察	○	○	○		
相談援助の方法・技術の理解	○	○	○		
ソーシャルワークの応用、事例検討への取り組み姿勢と対象者への理解	○	○	○		

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

テキストを事前に読んでおくこと。発表に向けて課題を行っておくこと。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

毎時間、授業内容、発表内容についての理解・考察を小レポートとしてまとめ、提出してもらう。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
児童家庭福祉		**2**	**保**	**1**	**鈴木久美子**

Ⅰ　主題

現代社会における児童家庭福祉の意義、制度や実施体系についての知識をもち、保育者を目指す者として、その動向と課題への理解関心を深め、児童の人権について理解する。

Ⅱ　授業の到達目標

1.児童家庭福祉の意義と制度について学び、それを説明できる。
2.児童家庭福祉の現状及び課題を学び、その動向について考察できる。
3.児童の人権について深く理解し、自らの考えをもつことができる。

Ⅲ　授業の概要

児童家庭福祉について、その理念や法制度、実施体系を整理するとともに、子どもと家庭をめぐる様々な現状と課題を具体的なテーマを通して明らかにしていく。講義形式であるが、テーマごとに関連映像のビデオを視聴する。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
1. 児童家庭福祉とは	児童家庭福祉の理念と概念を学ぶ
2. 児童家庭福祉の歴史	歴史的変遷と現代における意義を学ぶ
3. 児童家庭福祉と保育	保育を児童家庭福祉一分野としてみる
4. 家族・家庭のなかのこども（1）	家族・家庭の定義、類型、機能を学ぶ
5. 家族・家庭のなかのこども（2）	統計から現代日本の家族の姿を知る
6. 児童家庭福祉の制度と法体系	児童家庭福祉に関する法律、制度を学ぶ
7. 児童家庭福祉行財政と実施機関	児童家庭福祉の機関と施設、費用を学ぶ
8. 児童福祉施設とは	さまざまな児童福祉施設について学ぶ
9. 児童家庭福祉の現状と課題（1）	少子化と子育て支援サービスについて学ぶ
10. 児童家庭福祉の現状と課題（2）	多様な保育ニーズについて学ぶ
11. 児童家庭福祉の現状と課題（3）	児童虐待・DVについて学ぶ
12. 児童家庭福祉の現状と課題（4）	社会的養護について学ぶ
13. 児童家庭福祉の現状と課題（5）	障がいのある子どもについて学ぶ
14. 児童家庭福祉の課題と展望（1）	児童の人権擁護について学ぶ
15. 児童家庭福祉の課題と展望（2）	児童家庭福祉の課題と展望をまとめる
定期試験	筆記試験

Ⅴ　使用テキスト・教材等

保育と児童家庭福祉　　櫻井奈津子　　みらい　　2013

Ⅵ　参考書・参考資料

授業内に適宜、紹介する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	60	30	10		
児童家庭福祉の意義と制度についての理解	○	○			
児童家庭福祉の現状と課題についての理解と考察	○	○	○		
児童の人権についての理解と考察	○	○	○		

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

テキストを事前に読んでおくこと。子ども・家庭に関する新聞記事を読んで、スクラップを実施し、考察すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

毎時間、その内容に関する理解・考察を小レポートとしてまとめ、提出してもらう。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
子どもの遊びと発達Ａ		〔1〕	**保**	**2**	**馬飼野陽美**

Ⅰ　主題
子どもの発達過程と遊びについて学び、保育者の役割について理解を深める。

Ⅱ　授業の到達目標
1.子どもにとっての遊びの意味を理解し、年齢的変化を把握する。
2.子どもはどのようなことに興味を持ち、遊びが発展していくかについて考える。
3.発達についての知識を生かし、保育に生かす力を養う。

Ⅲ　授業の概要
子どもの年齢的発達を学んだうえで、実習での体験等を通して、各年齢期で現れる子どもの遊びの姿を知り、遊びの種類や玩具等についても学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1	遊びとは何か	遊びの意義や理論を学ぶ。
2	0歳児の遊びと発達1	0歳児の発達と遊びについて学ぶ
3	1歳児の遊びと発達1	1歳児の発達と遊びについて学ぶ
4	2歳児の遊びと発達1	2歳児の発達と遊びについて学ぶ
5	3歳児の遊びと発達1	3歳児の発達と遊びについて学ぶ
6	4歳児の遊びと発達1	4歳児の発達と遊びについて学ぶ
7	5歳児の遊びと発達1	5歳児の発達と遊びについて学ぶ
8	発達と遊びの指導	遊びの指導について学び、考える
9	0歳児の遊びと発達2	0歳児の発達と遊びを実体験から考える
10	1歳児の遊びと発達2	1歳児の発達と遊びを実体験から考える
11	2歳児の遊びと発達2	2歳児の発達と遊びを実体験から考える
12	3歳児の遊びと発達2	3歳児の発達と遊びを実体験から考える
13	4歳児の遊びと発達2	4歳児の発達と遊びを実体験から考える
14	5歳児の遊びと発達2	5歳児の発達と遊びを実体験から考える
15	まとめ　試験	乳幼児の発達過程と遊びについてまとめる

Ⅴ　使用テキスト・教材等

乳児期の発達と生活・あそび	長瀬美子	ひとなる書房	2014
幼児期の発達と生活・あそび	長瀬美子	ひとなる書房	2015
発達の扉　上	白石正久	かもがわ出版	1994
保育者が基礎から学ぶ乳児の発達	丸山美和子	かもがわ出版	2011
子どもの発達とあそびの指導	勅使千鶴	ひとなる書房	1999

Ⅵ　参考書・参考資料

あそびのひみつ	河崎道夫	ひとなる書房	1994

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	50	15	20	15	
発達についての理解	○	○		○	
遊びについての理解	○	○		○	
分担箇所の発表			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
担当箇所を分担し、資料を作成する。実習中の”あそび”について、記録しておく。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
＊テキストは5冊の中から各自１冊を選択。初回授業での説明後に購入すること。
発表担当箇所についてまとめた資料の発表を行い、話し合いの進行に責任を持つ。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
子どもの遊びと発達Ｂ		**〔1〕**	**保**	**2**	**馬飼野陽美**

Ⅰ　主題

子どもの興味関心について学び、”気になる子”と呼ばれる子どもたちの遊びと発達について考察していく。

Ⅱ　授業の到達目標

1.子どもの興味や関心について理解を深める。
2.気になる子の遊びについて学び、発達的意味を考える。
3.遊びや発達についての知識を応用して、保育に生かす。

Ⅲ　授業の概要

基本的な遊びについて学ぶとともに、こどもの興味や関心について調べ、遊びの展開を体験しながら学ぶ。
気になる子と呼ばれる子どもたちの遊びと、その指導について考える。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1	遊びの起源	人はなぜ遊ぶのか
2	いないないばあとかくれんぼ	いないないばあ、かくれんぼの面白さと意味を考える
3	わらべうたあそび	わらべうたあそびの面白さと意味を考える
4	おいかけっことおにごっこ	おいかけっこ、おにごっこの面白さと意味を考える
5	砂あそび・泥あそび	砂遊び・泥遊びの面白さと意味を考える
6	ルールのある遊び	ルールのある遊びの面白さと意味を考える
7	ごっこあそび	ごっこ遊びの面白さと意味を考える
8	つくる遊び	つくる遊びの面白さと意味を考える
9	気になる子どもの興味・関心	気になる子の興味や関心について考える
10	気になる子どものあそび1	興味関心が周囲と違う場合の保育について考える
11	気になる子どものあそび2	興味関心が周囲と違う場合の保育について考える
12	気になる子どものあそび3	興味関心が周囲と違う場合の保育について考える
13	気になる子どものあそび4	興味関心が周囲と違う場合の保育について考える
14	気になる子どものあそび5	興味関心が周囲と違う場合の保育について考える
15	まとめ	これまでの授業をまとめる

Ⅴ　使用テキスト・教材等

「気になる子」と言わない保育　赤木和重・岡村由紀子　ひとなる書房　2013

Ⅵ　参考書・参考資料

あそびのひみつ	河崎道夫	ひとなる書房	1994
子どもの発達と遊びの指導	勅使千鶴	ひとなる書房	1999

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%		40	30	30	
子どもの興味・関心についての理解		○	○	○	
気になる子どもの遊びについての考察		○	○	○	
分担箇所の発表			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

グループに分けて、それぞれの遊びについて企画する。
前回の授業について、まとめと考察をしてくる。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

前半は遊びの体験と考察、後半は気になる子の遊びや指導についてのロールプレイなどを中心とした授業となるので、積極的な授業参加が必要となる。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
カウンセリングⅠ		**〔1〕**	**保**	**2**	**大村壮、金子泰之、土屋廣人**

Ⅰ　主題

この授業では、幼児の現状を捉え、虐待、家族支援などの教育現場での問題の考察が目的である。

Ⅱ　授業の到達目標

1.いろいろな人の意見を聞き、問題にはさまざまな見方があることを理解できるようになる。
2.そのさまざまな見方によってさまざまな違った対策が立てられるようになる。
3.自分の目で見て考え行動する「考える保育」の手がかりをつかむ。

Ⅲ　授業の概要

この授業では、幼児理解の理論及び方法とカウンセリングや教育相談の理論及び方法を学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
1 カウンセリングとは何かⅠ	関わりと理解について
2 カウンセリングとは何かⅡ	受容と共感について
3 幼児理解Ⅰ	幼児の発達や発育を捉える
4 幼児理解Ⅱ	保育における幼児の姿
5 カウンセリングの意味Ⅰ	保育におけるカウンセリングの意味
6 カウンセリングの意味Ⅱ	さまざまな理論の違い
7 体験学習Ⅰ	正常は正しいのか？
8 気になる子への指導と援助Ⅰ	ADHD
9 気になる子への指導と援助Ⅱ	LD
10 気になる子への指導と援助Ⅲ	自閉症
11 気になる子への指導と援助Ⅳ	高機能自閉症
12 体験学習Ⅱ	傾聴を体験する
13 子どもの情緒的な問題Ⅰ	愛着障害
14 子どもの情緒的な問題Ⅱ	チックや緘黙
15 まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

第１回目の授業で指示する。

Ⅵ　参考書・参考資料

授業中に指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	60	20		20	
問題の見方の習得	○	○		○	
考える保育の理解	○	○		○	
援助の仕方の習得	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

授業で配布するプリントや授業中に指示した文献をよく読んでおくこと。また不明な点は積極的に質問すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業に関係のない私語は絶対にしないこと。注意に従わない場合、退席を命じる。

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
カウンセリングⅡ		**〔1〕**	**保**	**2**	**大村壮、金子泰之、土屋廣人**

Ⅰ　主題

この授業では、虐待、家族支援などの教育現場での問題の考察が目的である。

Ⅱ　授業の到達目標

1.問題のアセスメントを通して、問題の見立てを理解できる。
2.子育て家庭の支援について理解できる。
3.以上を通して自分の目で見て考え行動する「考える保育」の手がかりをつかむ。

Ⅲ　授業の概要

この授業では、問題のアセスメントや具体的な関わりについて学び、家族への支援（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む）についての理論及び方法を学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1 問題のアセスメントⅠ	面接技法と面接を通しての理解
2 問題のアセスメントⅡ	知能検査・発達検査からの理解
3 問題のアセスメントⅢ	行動観察からの理解
4 体験学習Ⅰ	性格検査を体験する
5 ロールプレイⅠ	自己理解を促す
6 ロールプレイⅡ	他者理解を促す
7 ロールプレイⅢ	幼児期の関わり
8 体験学習Ⅱ	スクィグルを体験する
9 家族の支援Ⅰ	家族援助の基本
10 家族の支援Ⅱ	障害受容を中心に
11 家族の支援Ⅲ	子育て不安への支援
12 家族の支援Ⅳ	虐待と緊急支援
13 家族の支援Ⅴ	他の専門機関との連携
14 地域支援	地域における保育者の役割
15 まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

第１回目の授業で指示する。

Ⅵ　参考書・参考資料

授業中に指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	60	20		20	
問題の見立ての習得	○	○		○	
子育て家庭支援の理解	○	○		○	
考える保育の理解	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

授業で配布するプリントや授業中に指示した文献をよく読んでおくこと。また不明な点は積極的に質問すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業に関係のない私語は絶対にしないこと。注意に従わない場合、退席を命じる。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
子どもの家庭と暮らしA		〔1〕	**保**	**2**	**土屋廣人**

Ⅰ 主題
子どもに影響を与える家庭的・社会的環境の種類・内容を理解し、環境調整の重要性を学ぶ。

Ⅱ 授業の到達目標
1.研究方法を理解し、活用できるようになる。
2.養育態度・生活環境による子どもへの影響を理解し、支援者としての構えを身につける。
3.さらに、さまざまな支援策を理解し、家族支援力を高める。

Ⅲ 授業の概要
授業項目ごとにグループ・個別での検討・発表を行い、一人では深めることが難しい調査などを行うとともに、子どもの支援に関する保育者の心構えを考えていく。

Ⅳ 授業計画と内容
演習を中心に、個々別々な家庭や児童の支援について、意欲的に創意工夫する力を養う。

項目	内容
1. 子どもをとりまく環境 1	KJ 法、まとめ方を理解する
2. 子どもをとりまく環境Ⅱ	環境をテーマにグループ検討する
3. 子どもをとりまく環境Ⅲ	環境をテーマにグループ調査・研究を行う
4. 子どもをとりまく環境Ⅳ	発表し、情報の共有を行う
5. 養育態度と子どもへの影響 I	親子関係診断を通して、しつけの影響について学ぶ
6. 養育態度と子どもへの影響Ⅱ	虐待の背景と保育者の対応について学ぶ
7. 養育態度と子どもへの影響Ⅲ	体罰が起こる日本的背景について学ぶ
8. 養育態度と子どもへの影響Ⅳ	しつけ・体罰を自らの保育観から考える
9. 貧困と対策 I	子どもの権利、貧困について学ぶ
10. 貧困と対策Ⅱ	貧困対策についてグループ検討を行う
11. 貧困と対策Ⅲ	発表し、情報の共有を行う
12. 障がい児支援 I	障がい児対応の理解を深める。
14. 障がい児支援Ⅱ	保護者支援について学ぶ
15. まとめ	今までの自らの学びを整理する

Ⅴ 使用テキスト・教材等
テキストは使用しない。適宜資料を提示する。

Ⅵ 参考書・参考資料
児童家庭福祉等関係する教科書を参考とする。

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100		60	20	20	
研究方法の理解		○	○	○	
子どもに影響する環境の理解		○	○	○	
支援策の理解		○	○	○	

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）
提示されたテーマ・課題について自ら研究・検討することが必要である。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）
順番に報告しあうので、積極的に参加すること。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
子どもの家庭と暮らしB		〔1〕	**保**	**2**	**土屋廣人**

Ⅰ　主題

事例検討方法を理解し、子どもとその取り巻く環境との相互作用について学ぶ。

Ⅱ　授業の到達目標

1.事例報告・支援策の検討方法を理解し、活用できるようになる。
2.支援策を理解するとともに、子どもとその環境の相互作用を理解し、支援者としての配慮すべきことを理解する。
3.さらに、個々の状況に応じた支援力を高める。

Ⅲ　授業の概要

教員の用意した事例・資料から事例検討の方法・対策について学ぶとともに、学生自らの気になる事例を発表しあい、さまざまな支援方法についての知識・支援力を高めていく。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. 様々な子どもの環境状況Ⅰ	ライフサイクル・子育て期の保護者の発達課題について学ぶ
2. 様々な子どもの環境状況Ⅱ	自殺防止、共依存・DV・依存症について学ぶ
3. 事例検討の方法Ⅰ	事例報告と検討方法を学ぶ
4. 事例検討の方法Ⅱ	グループ事例検討(見立て)する
5. 事例検討の方法Ⅲ	グループ事例検討(課題と支援対策)する
6. 事例検討の方法Ⅳ	まとめを発表し、検討方法を深める
7. 障碍児と家族Ⅰ	さまざまな障碍と家族の課題を考える
8. 障碍児と家族Ⅱ	支援策、支援施設、支援方法を考える
9. 子ども間暴力・いじめ	いじめを考える
10. 虐待事例等と対応Ⅰ	虐待防止と家族支援を考える
11. 虐待事例等と対応Ⅱ	虐待の背景を理解し、死亡事例等から支援課題を考える
12. 子育てによくある悩みⅠ	指しゃぶり、登園渋滞事例から考える
13. 子育てによくある悩みⅡ	落ち着かない子どもなどの気になる子どもの事例から考える
14. 支援機関	支援機関とその役割を学ぶ
15. まとめ	これまでの授業をまとめる

Ⅴ　使用テキスト・教材等

テキストは使用せず、適宜資料を提示する。

Ⅵ　参考書・参考資料

児童家庭福祉等関係する教科書を参考とする。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100		60	20	20	
事例検討方法の理解		○	○	○	
子どもと環境の相互作用の理解		○	○	○	
支援方法の理解		○	○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

提示されたテーマ・課題について自ら研究・検討することが必要である。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

順番に報告しあうので、積極的に参加すること

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
家庭支援論		**2**	**保**	**2**	**酒井洋子**

Ⅰ 主題

人間関係が希薄になりつつある現代社会で、子どもが健全に育つ環境作りと家族支援のあり方を学び、実践方法を学ぶ。

Ⅱ 授業の到達目標

1.現代の家族を取り巻く社会状況を理解し子育て支援諸制度を知る。
2.様々な年代の子どもの発達課題を再検討して幼児期に何を支援すべきか考察できる。
3.保育現場に起きる家族の様々な問題の事例検討を学んで応用力をつける。

Ⅲ 授業の概要

事例や資料を通して制度の概要を知り、具体的な現場での支援の仕方を考察する。

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1 あなたにとって家族・家庭とは	各自の家族イメージ・時代の中の家族・家庭をどのように捉えるか
2 子どもにとっての家族・家庭	子どもは一人で生きられないことを踏まえての親子関係の再考
3 〃	兄弟関係・夫婦関係・近親者等・育つ場の条件
4 支援を必要とする家族と子育て施策	時代の変化と少子化・子育て支援策の概要
5 支援を必要とする問題やリスク	育児不安・育児困難、社会の中での家族・家庭の日常の問題
6 地域の子育て支援の実際と課題	保育所の支援・子育て支援センターの実践
7 保育を必要とする家族への支援	共稼ぎ家庭・養育困難家庭の支、保育所保育指針等
8 子ども対応と家庭支援の実際	連絡帳・送迎時の対応・相談等への対応と留意点
9 障がいを持つ子どもと家族への支援	家族を支えるということ、障がい受容・障がい児保育
10 〃	障がい別対応の特徴
11 子どもの 貧困の実態	貧困と子どもの暮らし、一人親家庭と子育て・生活支援
12 養育困難家庭への支援	児童相談所の役割、施設支援とその課題、専門機関間の連携
13 支援が不十分な場合	子ども時代の困難と成人後の困難・次世代連鎖
14 子育て支援の今後の課題	支援する側の課題・制度の課題・支援者の実践上の課題
15 子どもが育つということ	子どもが育つということ、ともに暮らす、子育て支援の方向

Ⅴ 使用テキスト・教材等

家庭支援論　阿部和子　萌文書林
保育所保育指針

Ⅵ 参考書・参考資料

実践 家庭支援論〔改訂版〕　松本園子 他　ななみ書房

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

学習項目＼成績評価方法	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他(専門用語理解)
配点比率(%)　合計 100	40	40		5	10
家庭支援の意義と状況理解	○	○			○
子育て家庭の支援体制の理解	○	○			○
地域の子育て機能の変化の理解	○	○	○		○
発達的観点を持った支援・	○	○			○
学ぶ姿勢と意見の表明	○	○		○	

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

実習等を通して家庭支援の実際（連絡ノートや保護者への相談・助言・地域子育て支援センターの活動）などに関心を持つ。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

①小レポートを提出する。②関連する報道に関心を持つ。
授業時間内に支援方法の事例検討・子どもや親への対応仕方の練習・自分の個性を知る試みなどを行います。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
社会的養護内容		〔1〕	**保**	**1**	**渡井すみ子、種田賢二 村松隆之**

Ⅰ　主題

この授業では、社会的養護を担う児童福祉施設等の援助の実際と課題について学び、保育士の専門性の向上を図る。

Ⅱ　授業の到達目標

1.児童福祉施設において日常的に展開されている具体的な児童の生活や援助者の援助について理解する。
2.児童の心身の成長・発達を保障し援助するために必要な知識や技術を習得する。
3.児童観、人間観を養う。

Ⅲ　授業の概要

講義を中心に進め、ビデオ、DVD及び新聞記事等の資料を活用した討議やレポート、発表などを取り入れていく。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1～ 2. 社会的養護について、入所の意義	家庭の代替、問題や障害の治療、発達の保障　等
3～ 4. 児童福祉施設における社会的養護	愛情・承認・所属の欲求の充足　等
5. 児童福祉施設における養護の理念	児童養護の方法の基本的な考え方
6. 児童福祉施設における子どもの心の理解	子どもの心のサインの現れ方と対応　等
7. 児童福祉施設における援助・支援の内容	基本的生活習慣の獲得、生活リズムと日課、衣食住
8. 児童福祉施設における日課	日課表の作成とポイント
9～10. 自立支援計画	事例を通して支援計画の作成とポイント
11～12. 各児童福祉施設の具体的援助内容	乳児院、児童養護施設、児童自立支援施設　等
13. 児童福祉施設における援助者	援助者の種類と役割、援助者に求められる基本
14. 児童福祉施設における課題	虐待を受けた子どもへの援助、施設内虐待の防止
15. 児童福祉施設と関係機関との連携	家庭支援と養護の課題、関係機関との連携の課題
定期試験	筆記試験

Ⅴ　使用テキスト・教材等

社会的養護内容　　福永博文　　北大路書房

Ⅵ　参考書・参考資料

随時、プリント、ビデオ、DVD、新聞記事等を活用する。また「社会的養護」、「児童家庭福祉」等の教科書を参考とする。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	60	10		30	
社会的養護について、入所の意義	○	○		○	
児童福祉施設における子どもの心の理解	○	○		○	
児童福祉施設における援助・支援の内容	○	○		○	
児童福祉施設における援助者	○	○		○	
児童福祉施設における課題	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

子どもに関わる新聞記事をできるだけ入手し、いま起きている子どもの諸問題に対し、自分なりに検証できる問題意識を常に持ち授業に臨むこと。また、復習並びにテキストの次回部分を必ず読んでおくこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

社会福祉六法（小六法でよい）を必ず携行すること。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
保育相談支援		**〔1〕**	**保**	**2**	**鈴木久美子、加藤光良**

Ⅰ　主題

保育相談支援の基本を学ぶと同時に、保育所等児童福祉施設における保護者支援の実際について知り、その方法や技術を身につける。

Ⅱ　授業の到達目標

1.保育相談支援の意義と基本について学び、説明できる。
2.保育相談支援の実際を学び、その知識を利用して、応用できるようになる。
3.現場での保護者支援の実際について理解し、その技術を身につけることができる。

Ⅲ　授業の概要

演習形態で進める。グループワークを実施し、意見交換をしたうえで、各人の考察をまとめ、理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
1.保育者と保護者支援	保護者に対する保育相談支援の重要性を知る
2.保育相談支援の意義	保育士の特性を生かした支援について学ぶ
3.保育相談支援の基本（1）	子どもの最善の利益と支援について考察する
4.保育相談支援の基本（2）	信頼関係を基本としたかかわりについて学ぶ
5.保育相談支援の基本（3）	地域の社会資源の活用、関係機関との連携を知る
6.保育相談支援の実際（1）	保護者指導、保護者支援の内容について学ぶ
7.保育相談支援の実際（2）	保護者支援の方法と技術について学ぶ
8.保育相談支援の実際（3）	保護者支援の計画、記録、評価、カンファレンスを学ぶ
9～12.児童福祉施設における保育相談支援(1)	保育所における保育相談支援を学ぶ（事例検討、ロールプレイ含む）
13～14.児童福祉施設における保育相談支援(2)	保育所以外の施設における保育相談支援を学ぶ（事例検討、ロールプレイ含む）
15.相談援助者に必要なもの保護者とのかかわりについて考察する	
定期試験	筆記試験

Ⅴ　使用テキスト・教材等

演習　保育と相談援助　　前田敏雄編　　みらい　　2013

Ⅵ　参考書・参考資料

授業内に適宜、紹介する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50	20	30		
保育相談支援の意義と基本の理解	○	○	○		
保育相談支援の内容や方法の理解	○	○	○		
保護者支援に関する事例検討、ロールプレイ等への取り組みと理解	○	○	○		

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

テキストを事前に読んでおくこと。発表に向けて課題を行っておくこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
障害児保育		〔2〕	**保**	**2**	**吉川治、川合忠美**

Ⅰ　主題

この授業では障害児保育と一般の保育の連続性に気づき、障害を持つ子が地域の中で人として当たり前の生活を送れるように支援する保育の在り方を学ぶことが目的である。

Ⅱ　授業の到達目標

1.子どもの発達を理解することで発達障害を理解できるようになる。
2.障害の特徴について学び、支援の方法について考察できるようになる。
3.支援方法の知識を活用して、一般の保育に応用できるようになる。

Ⅲ　授業の概要

この授業は健常児の発達を理解したうえで障害を持つ子の発達と特性を理解することを始まりとする。また、それぞれの障害の基礎知識を理解し、実際の保育の場でどのように支援していけばよいかを学ぶ場とする。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1 自己肯定感とは	自分を見つめ直し、自分を大切に感じてみる。
2 子どもの発達と発達保障	発達とは何か。発達を保障するとは何か。
3 発達障害とは	障害の基礎的な定義とその実際
4 障害を持つ子を育てる	保護者の気持ちを知り、どう援助していくか。
5 障害の基礎知識と保育	「発達の遅れ」
6 障害の基礎知識と保育	「自閉症」
7 障害の基礎知識と保育	「視覚障害」 演習含む
8 障害の基礎知識と保育	「運動障害」
9 障害の基礎知識と保育	「聴覚障害」演習含む
10 障害の基礎知識と保育	「医療との連携が必要な子どもたち」
11 障害の基礎知識と保育	「軽度発達障害　1」
12 障害の基礎知識と保育	「軽度発達障害　2」
13 障害の基礎知識と保育	「認知のアンバランス」
14～15 事例検討	夏の実習で出会った子どもたちをテーマに事例検討

Ⅴ　使用テキスト・教材等

新版テキスト障害児保育　近藤直子、白石正久他　全障研出版
発達の扉　上　白石正久　かもがわ出版

Ⅵ　参考書・参考資料

発達の扉　下　白石正久　かもがわ出版

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	事例発表	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	40	10	30	20	
子どもの発達と発達保障	○	○		○	
障害の基礎知識と保育	○	○	○	○	
事例検討			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

後半の事例検討でグループごとに事例を発表するので施設実習中に気になる子の観察を行い、事例を出せるようにすること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

活発に質問をして授業を自分のものとするように。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
乳児保育		〔2〕	保	1	八木いくみ、太田嶋裕子 山岸陽子

Ⅰ 主題

現在、女性労働の増加により乳児保育への高まりが大きい。言い換えると人格の形成の土台を創る乳児期の保育に関わる保育者への期待が大きいことである。この授業では、子どもの最善の利益を保障し、豊かな発達保障を生み出す保育の基礎知識を学び、実践力の高い専門性が身につく事を目標とする。

Ⅱ 授業の到達目標

1.乳児の心身の発達を理解し、乳児保育の基礎的理解を深める。
2.乳児を取り巻く歴史・社会的状況・ニーズを学び、乳児保育への理解
3.さらに学問領域の科学的考察力をもとに暖かい心を持つ保育力を身に付ける。

Ⅲ 授業の概要

この授業では、乳児保育の歴史／子ども理解（心身の発達）／保育指導・計画／親への支援など、幅広く乳児保育理解の知識を学び、乳児保育に求められる課題を理解し、乳児の最善の利益を保証する保育実践力の高い専門性を身に付ける。

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1～2　乳児保育の理念と役割	乳児保育の理念と歴史的変遷、役割と機能について
3～11　乳児保育の現状と課題	保育所、乳児院、家庭的保育や子育て支援の場の現状について調べ学習を行う
12～20　3歳児未満児の発達と保育内容	乳児保育における基本的な知識・技能に基づく援助やかかわり 6か月未満児の発達と保育内容 6か月から1歳3か月未満児の発達と保育内容 1歳3か月から2歳未満児の発達と保育内容 2歳児の発達と保育内容
21～29　乳児保育の実際、乳児保育の連携	保育課程に基づく指導計画の作成と観察・記録および自己評価 個々の発達を促す生活と遊びの環境 職員間の協働 保護者とのパートナーシップ 保健・医療機関、家庭的保育、地域子育て支援との連携
30 まとめ	保育者の専門性について考える

Ⅴ 使用テキスト・教材等

保育実習Ⅰ、保育実習指導Ⅰで使用する「見る・考える・創りだす乳児保育」を使用する

Ⅵ 参考書・参考資料

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	50	30	10	10	
乳児の心身の発達の理解	○	○		○	
乳児保育の歴史・社会のニーズの理解	○	○		○	
問題整理と保育応用・実践力	○	○	○	○	

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

子どもに関する報道(ﾃﾚﾋﾞ・新聞など)に関心を持ち子どもの状況を日頃から考える。
その日に学んだ学習を前回までに学んだ学習と合わせ、関連しながら復習をする

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
保育実習Ⅰ		**(4)**	**保**	**1・2**	**田村元延**

Ⅰ　主題

児童福祉施設の内容や機能等を、実習体験を通して理解する。

Ⅱ　授業の到達目標

1.保育所、児童福祉施設等の役割や機能を具体的に理解する。観察や子どもとのかかわりを通して子どもへの理解を深める。

2.既習の教科の内容を踏まえ、子どもの保育および保護者への支援について総合的に学ぶ。保育の計画、観察、記録及び自己評価等について具体的に理解する。

3.保育士の業務内容や職業倫理について具体的に学ぶ。

Ⅲ　授業の概要

保育実習Ⅰは、保育所実習（2単位・1年次、12 日間）と、児童福祉施設実習（2単位・2年次、11 日間）を含み、 実習計画に基づいて以下の内容を学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

＜保育所実習の内容＞

1. 保育所の役割と機能	保育所の生活と一日の流れ／保育所保育指針の理解と保育の展開
2. 子ども理解	子どもの観察とその記録による理解／子どもの発達過程の理解／子どもへの援助やかかわり
3. 保育内容・保育環境	保育の計画に基づく保育内容／子どもの発達過程に応じた保育内容／子どもの生活や遊びと保育環境／子どもの健康と安全
4. 保育の計画、観察、記録	保育課程と指導計画の理解と活用／記録に基づく省察・自己評価
5. 専門職としての保育士の役割と職業倫理	保育士の業務内容／職員間の役割分担や連携／保育士の役割と職業倫理

＜児童福祉施設実習（居住型児童福祉施設・障害児通所施設等）の内容＞

1. 施設の役割と機能	施設の生活と一日の流れ／施設の役割と機能
2. 子ども理解	子どもの観察とその記録／個々の状態に応じた援助やかかわり
3. 養護内容・生活環境	計画に基づく活動や援助／子どもの心身の状態に応じた対応／子どもの活動と生活の環境／健康管理・安全対策の理解
4. 計画と記録	支援計画の理解と活用／記録に基づく省察・自己評価
5. 専門職としての保育士の役割と倫理	保育士の業務内容／職員間の役割分担や連携／保育士の役割と職業倫理

Ⅴ　使用テキスト・教材等

幼稚園・保育所実習　パーフェクトガイド	小櫃智子　他	わかば社	2013
見る・考える・創りだす乳児保育	CHS子育て文化研究所	萌文書林	
福祉施設実習ハンドブック	内山元夫他	みらい	
全国保育士会倫理綱領ガイドブック			
実習計画資料、授業内配布資料			

Ⅵ　参考書・参考資料

随時紹介する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法／学習項目	試験	実習日誌	成果発表・作品	実習態度	その他(実習先評価)
配点比率(%)　　合計 100		30		30	40
保育所・児童福祉施設の役割や機能の理解		○		○	○
観察や子どもとのかかわりによる子ども理解		○		○	○
保育および保護者支援についての理解		○		○	○
保育計画、観察、記録及び自己評価の理解		○		○	○
保育士の業務内容や職業倫理の理解		○		○	○

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

実習オリエンテーションへの出席。実習日誌の記入。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

時間および提出物期限を厳守すること。実習中、教員巡回時に面接指導を行う。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
保育実習指導Ⅰ		〔2〕	**保**	**1・2**	**田村元延**

Ⅰ　主題

保育実習Ⅰの事前事後学習を通して、保育士に対する職業的理解を深め、進路選択にむけて自己を見つめる。

Ⅱ　授業の到達目標

1.保育実習の意義・目的を理解する。実習の内容を理解し、自らの課題を明確にする。

2.実習施設における子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等を理解し、実習の計画、実践、観察、記録、評価の方法や内容について具体的に理解する。

3.実習の事後指導を通して実習の総括と自己評価を行い、新たな課題や学習目標を明確にする。

Ⅲ　授業の概要

保育所実習および児童福祉施設実習と連動した授業である。実習全体の見通しをもって授業に臨むこと。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. 実習先の決定方法について	電話のかけ方、他
2. 実習全体のオリエンテーション	実習計画の理解
3～7. 課題研究:保育と児童文化	さまざまな児童文化財に親しむ
8. 自主実習について	自主実習の目的　何を学ぶか
9～14. 課題研究:保育と生活技術	保育に必要な生活技術を確認する
15. 夏休みの過ごし方	自ら学ぶこと
16～20. ＜保育所実習に向けて＞	
実習の内容と課題の明確化	保育の現場から(外部講師の講義)
21～25. 実習の計画と記録	指導案　日誌の書き方
実習に際しての留意事項	細菌検査等について　諸注意
26. 事後指導(保育所実習)	保育所実習の反省会
27～30. ＜児童福祉施設実習に向けて＞	
実習の内容と課題の明確化	児童福祉施設の現場から(外部講師の講義)
実習の計画と記録	日誌の書き方
実習に際しての留意事項	細菌検査等について　諸注意
事後指導(施設実習)	施設実習の反省会

Ⅴ　使用テキスト・教材等

幼稚園・保育所実習　パーフェクトガイド	小櫃智子　他	わかば社	2013
見る・考える・創りだす乳児保育	CHS子育て文化研究所	萌文書林	
福祉施設実習ハンドブック	内山元夫他	みらい	
全国保育士会倫理綱領ガイドブック			
実習計画資料、授業内配布資料			

Ⅵ　参考書・参考資料

随時紹介する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100		50		50	
保育実習の意義・目的の理解		○		○	
実習内容の理解と課題の明確化		○		○	
子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等についての理解		○		○	
実習の計画、実践、観察、記録、評価の方法や内容の理解		○		○	
自己評価による課題や目標の明確化		○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

テキストを用いた自主学習を行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

時間および提出物期限を厳守すること。

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
保育実習Ⅱ		**(2)**	**保**	**2**	**田村元延**

Ⅰ　主題

本科目は、厚生労働省認可保育所(園)で実習を行う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.保育所の役割や機能について具体的な実践を通して理解を深める。子どもの観察や関わりの視点を明確にすることを通して保育の理解を深める。
2.既習の教科や保育実習Ⅰの経験を踏まえ子どもの保育及び保護者支援について総合的に学ぶ。保育の計画、実践、観察、記録及び自己評価について実際に取組み理解を深める。
3.保育士の業務内容や職業倫理について具体的な実践に結びつけて理解する。保育士としての自己の課題を明確化する。

Ⅲ　授業の概要

保育実習　Ⅰで習得した知識や理解したことや講義・演習等で学んだ理論を基に、保育士としての知識や技術をさらに深めると共に、保育観の確立を目指す。

Ⅳ　授業計画と内容

(2年次夏季　12 日間実施)
・保育全般に参加し、保育技術を取得する。
・子どもの個人差について理解し、対応方法を取得する。
・指導計画を立案し、実践する。
・子どもの、家族とのコミュニケーションの方法を具体的に取得する。
・地域社会に対する理解を深め、連携方法具体的に取得する。
・子どもの、最善の利益への配慮を学ぶ。
・保育士としての職業倫理を理解する。
・保育士に求められている資質、能力、技術に照らし合わせ事故の課題を明確化する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

実習計画資料、授業内でプリントを配布する。
『全国保育士会倫理綱領ガイドブック』

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	実習日誌	成果発表・作品	実習態度	その他(実習先評価)
配点比率(%)　　合計 100		30		30	40
保育実習の意義と目的を理解		○		○	○
保育実践力を培う。		○		○	○
保育の観察、記録及び自己評価等を踏まえた保育の改善について実践や事例を通して学ぶ。		○		○	○
保育士の専門性と職業倫理について理解する。		○		○	○
実習の総括と自己評価を行い、保育に対する課題や認識を明確にする。		○		○	○

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

保育所保育指針等法規や規則に関する物に目を必ず通し、さらに新聞・ニュース等の情報に興味と関心を持って時事を常に理解するように心掛けること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

この実習を行うためは、1年次の「保育所実習」の単位をすでに取得していることを条件とする。
時間及び提出期限を遵守すること。実習期間内に巡回指導による面接指導を実施する。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
保育実習指導Ⅱ		**〔1〕**	**保**	**2**	**田村元延**

Ⅰ 主題
本科目は、厚生労働省認可保育所(園)で実習を行うために必要な技術・知識を総合的に学ぶ。

Ⅱ 授業の到達目標
1.保育実習の意義と目的を理解し、保育について総合的に学ぶ。保育の観察、記録及び自己評価等を踏まえた保育の改善について実践や事例を通して学ぶ。
2.実習や既習の教科の内容やその関連性を踏まえ、保育実践力を培う。
3.保育士の専門性と職業倫理について理解する。実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、保育に対する課題や認識を明確にする。

Ⅲ 授業の概要
保育実習Ⅱの意義や目的を理解し、実習に向けた目的意識を高め、課題を持って実習に取り組めるように学ぶ。

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1. 実習園を決める	実習希望園への連絡方法の確認。
2. 保育実習Ⅱについてのガイダンス	
3. 就職活動について	就職活動を円滑に行えるようにする。
4. 後輩との交流	1年生に、自らの実習経験を語ることによりコミュニケーションを図る。
5. 実習事後についてのガイダンス	体験・講義
6. 実習報告会	巡回教員からの事後指導。
7～14. 教材研究　事例研究　実習報告等	ゼミ形式で行う。
15. まとめ	

Ⅴ 使用テキスト・教材等
1年次に使ったテキストを用いる。実習日誌等も用いる。
『全国保育士会倫理綱領ガイドブック』

Ⅵ 参考書・参考資料
1年次に使ったテキスト、実習日誌等。

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他(実習先評価)
配点比率(%)　合計 100		50		50	
保育実習の意義と目的を理解		○		○	
保育実践力を培う。		○		○	
保育の観察、記録及び自己評価等を踏まえた保育の改善について実践や事例を通して学ぶ。		○		○	
保育士の専門性と職業倫理について理解する。		○		○	
実習の総括と自己評価を行い、保育に対する課題や認識を明確にする。		○		○	

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）
就職を視野に入れた自主実習も積極的に臨むこと。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）
社会人になるためにふさわしい態度・身だしなみに気を付けて臨むこと。

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
保育実習Ⅲ		(2)	**保**	**2**	**金子泰之**

Ⅰ　主題

保育所以外の児童福祉施設等での実習を通して能力、技術を習得する。

Ⅱ　授業の到達目標

1.保育実習の経験と反省、すでに学んだ教科の知識やスキルを磨く。
2.家庭と地域の生活実態に触れ、子どもの家庭福祉ニーズを理解する。
3.子育てを支援するための能力を養う。

Ⅲ　授業の概要

保育所以外の児童福祉施設等での 90 時間の実習

Ⅳ　授業計画と内容

◆　実習（各児童福祉施設、児童館など）90 時間　2 年次　夏季から秋季

・養護全般に参加し、養護技術を習得する。
・子どもの個人差について理解し、対応方法を習得する。特に発達の遅れや生活環境にともなう子どものニーズを理解し、その対応について学ぶ。
・援助計画を立案し、実際に実践する。
・子どもの家族とのコミュニケーションの方法を具体的に習得する。
・地域社会に対する理解を深め、連携の方法について学ぶ。
・子どもの最善の利益を具体化する方法について学ぶ。
・保育士としての倫理を具体的に学ぶ。
・児童福祉施設の保育士に求められている資質、能力、技術に照らし合わせて自己の課題を明確化する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

福祉施設実習ハンドブック　　内山元夫　　みらい
実習計画資料、授業内配布資料

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	実習日誌	成果発表・作品	授業態度	その他（実習先評価）
配点比率(%)　合計 100%		50			50
養護技術の習得		○			○
援助技術の習得		○			○
実習記録の習得		○			○

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

テキストを事前によく読んでおくこと。授業内配布プリントをよく読んでおくこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

時間および提出物期限を厳守すること。
実習期間内に巡回指導による面接指導を実施する。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
保育実習指導Ⅲ		**〔1〕**	**保**	**2**	**金子泰之**

Ⅰ 主題
児童福祉施設等での実習の事前事後学習を通して能力、技術を習得する。

Ⅱ 授業の到達目標
1.保育所以外の児童福祉施設等での実習の意義と目的を理解する。
2.実習や既習の教科内容を踏まえ、保育実践力を身につける。
3.保育士の専門性と職業倫理について理解する。

Ⅲ 授業の概要
保育士としての技能を習得するための児童福祉施設等での実習の事前事後学習

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1. 保育実習Ⅲの意義と目的	保育実習Ⅲの意義と目的を理解する。
2. 保育所以外の児童福祉施設等の理解①	保育所以外の児童福祉施設等の種類を理解する。
3. 保育所以外の児童福祉施設等の理解②	保育所以外の児童福祉施設等の目的を理解する。
4. 保育所以外の児童福祉施設等の理解③	保育所以外の児童福祉施設等の役割を理解する。
5. 実習記録の意義と方法①	実習記録の意義と目的を理解する。
6. 実習記録の意義と方法②	実習記録のさまざまな方法を学ぶ。
7. 実習の心構え①	施設での子どもとの接し方の注意点を学ぶ
8. 実習の心構え②	守秘義務などのプライバシーの考え方を学ぶ。
9. 事後指導①	施設ごとでの実習の反省を共有する。
10. 事後指導②	施設ごとでの実習の学びを共有する。
11. 事後指導③	他施設との反省や学びを交換する。
12. 実習記録の整理	実習記録を整理し今後の課題を明確にする。
13. 保育士の専門性と職業倫理	保育実習Ⅲでの保育士の専門性を話し合う
14. 課題の整理	今後の課題を整理する。
15. まとめ(自己評価)	

Ⅴ 使用テキスト・教材等
福祉施設実習ハンドブック　内山元夫　みらい
実習計画資料、授業内配布資料

Ⅵ 参考書・参考資料

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他( )
配点比率(%) 合計 100%		50		50	
施設の理解		○		○	
実習記録の理解		○		○	
反省や学びの深まり		○		○	

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）
テキストの自主学習を進めること。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）
授業時間および提出物の期限をしっかりと守ること。

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
幼児教育者論	**2**		**英保**	**1**	**前浦律子**

Ⅰ　主題

この授業では、幼児教育の意義や内容、保育者としての在り方や職責について理解を深め、保育者としての自己を確立することを目的とする。

Ⅱ　授業の到達目標

1.保育の意義・内容・専門性について理解することができる。
2.幼稚園教諭免許・保育士資格の意味を知り、専門職としてその役割(職務)を理解することができる。
3.法令で定められた保育者の責務について知り、その職責を認識することができる。

Ⅲ　授業の概要

幼児教育の制度・保育内容・保育者の職責を理解し、保育者としての自己を確立する。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. オリエンテーション	授業の概略と計画
2. 保育者とは	これから求められる保育者とは
3. 幼稚園教諭免許・保育士資格・保育教諭	免許・資格の意味について
4～6. 幼稚園、保育所、認定こども園について	幼稚園と保育所、認定こども園の違いについて 幼稚園教育要領・保育所保育指針・保育要領について
7.保育者の役割とは	保育者の役割と職務について 保育者の専門性について
8～9. 保育の本質とは	保育の意味・内容について 養護と教育の一体化について
10. 保育と環境(1)	環境を通して行う教育の意義
11. 保育と環境(2)	遊びを通して総合的に指導する意味について
12. 保育と環境(3)	知的好奇心・探究心を育てる環境について
13. 幼・保・こども園・小連携	なぜ、今、幼・保・こども園・小連携なのか
14. 子育て支援	なぜ、今、子育て支援が必要か
15. 法令について	保育者に必要な法令について

Ⅴ　使用テキスト・教材等

シードブック　保育者論　　榎田二三子・大沼良子・増田時枝　　建帛社

Ⅵ　参考書・参考資料

幼稚園教育要領解説
保育所保育指針解説書
幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	80	10		10	
保育の内容・意義・専門性の理解	○	○		○	
保育者の役割についての理解	○	○		○	
保育者に必要な法令についての理解	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

教科書、配布資料、文献等をよく読んでおくこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

参考文献は、必要に応じて講義内で紹介する。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
教育原理		**2**	**英保**	**1**	**竹石聖子**

Ⅰ 主題
教育の意義と目的を理解し、教育と保育とのかかわりについて理解を深める。

Ⅱ 授業の到達目標
1.教育の意義と目的及び児童福祉等との関わりについて理解する。
2.教育の思想、歴史、制度について理解する。
3.教育実践の現状と課題について理解し、考察をする。

Ⅲ 授業の概要
以下の項目に即しながら、教育という営みの根源を深める。

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1. 教育とは何か	教育の意義についての理解
2. 教育の目的	教育の目的についての理解
3. 人間形成と家庭・地域・社会	家庭・地域・社会の教育機能
4. 「遺伝と環境」と教育	人の育ちの遺伝的要素と環境
5. 西洋の教育思想	諸外国の思想の理解
6. 日本の教育思想	日本の思想の理解
7. 教育の制度	教育制度の理解
8. 教育改革の今とこれから	教育改革の現状の理解
9. 保育・幼児教育制度の変化	保育制度の変化の理解
10. 教育の方法	内容、計画、方法についての理解
11. カリキュラムと教育評価	教育課程、評価の理解
12. 保育における「遊び」	「遊び」を通した教育とは
13. 保育者とは	保育者の役割とは
14. 外国の保育から学ぶ	様々な保育から学ぶ
15. 子育てをめぐる現状と課題	現代的課題の理解と考察

Ⅴ 使用テキスト・教材等
教育原理－保育実践への教育学的アプローチ　広田照幸・塩崎美穂編著　樹村房

Ⅵ 参考書・参考資料
授業中に一覧を配布する

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50	30		20	
教育の意義と目的の理解	○	○		○	
教育思想と歴史の理解	○	○		○	
教育制度の歴史と現状の理解	○	○		○	
教育実践の理解	○	○		○	

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）
テキストの該当箇所をよく読んでくること

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）
授業に主体的に参加すること

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
保育課程総論		**2**	**保**	**1**	**加藤寿子**

Ⅰ　主題

この科目では、保育における計画の基本的な考えを理解した上で、他教科の学びと関連させながら、指導計画を作成する力を養う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.保育の立案から評価に至る保育課程の構造及び意義を理解する。
2.幼稚園教育要領・保育所保育指針に基づいた保育の立案の仕方を理解する。
3.保育記録及び、指導計画作成ができる。

Ⅲ　授業の概要

保育の計画の構造及び意義について学んだ上で、記録の仕方、立案の仕方について具体的に学んでいく。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1　教育課程・保育課程とは何か	教育課程・保育課程の意味と目的
2　教育課程の変遷	幼稚園における教育課程
3　保育課程の変遷	保育所における保育課程
4　保育における計画の意義	保育計画作成の意義
5　教育課程・保育課程の編成	長期の指導計画
6　教育課程・保育課程の編成	短期の指導計画
7　保育記録の実際1	保育記録の意義について学ぶ
8　保育記録の実際2	具体的な保育場面を記録する
9　保育記録の実際3	具体的な保育場面を記録する
10　指導計画に向けて	指導計画の形式について
11　指導計画の作成1	指導計画の作成と留意事項
12　指導計画の作成2	指導計画の作成と展開
13　指導計画の作成3	指導計画の再編成
14　保育の評価	保育の評価と改善
15　まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

豊かな保育をめざす教育課程・保育課程　　林　秀雄　　みらい　　2012

Ⅵ　参考書・参考資料

幼稚園教育要領解説　　文部科学省　　フレーベル館　　2008
保育所保育指針解説書　　厚生労働省　　フレーベル館　　2008

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%		10	70	20	
保育・教育課程の意義の理解			○	○	
指導計画の作成方法の理解		○	○	○	
記録作成及び指導案作成		○	○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

授業に示す課題については、各自で意欲的に進めること

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
教育実習		**(5)**	**英保**	**1・2**	**加藤明代**

Ⅰ 主題

実習講義と実習を通して幼稚園教育の意義と内容、幼稚園教諭の役割を理解できるようになる。

Ⅱ 授業の到達目標

1.幼稚園の役割と機能を具体的に理解できる。
2.子どもの観察とかかわりを通して、子どもの理解と幼稚園教諭のあり方を理解できる。
3.幼稚園教育の準備と計画、記録及び自己評価等について具体的に行うことができる。

Ⅲ 授業の概要

幼稚園実習(1 年次 1 週間/2 年次 3 週間の計 4 週間)と実習計画に基づく以下の内容を学ぶ。

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1. 教育実習(第Ⅰ期)のガイダンス	実習と実習講義の流れを理解する
2. 保育の力を蓄える; 「教材研究」 絵本	教育計画に関連する教材研究を行う(外部講師)
3. 先輩から学ぶ: 「先輩からの実習体験報告」	先輩の実習体験報告に学ぶ
4. 実習のはじまり	実習の意義と目的を確認する
5. 保育の現場から;「幼稚園の一日」	一日の流れを理解し、実習の内容を明確にする〈外部講師〉
6. 日誌の書き方	なぜ書くか、何を書くか、具体的な記述法を確認する
7. 第Ⅰ期実習の準備と心構え	実習の目標と課題を確認する 実習前の準備、実習中の連絡などについて
8. 第Ⅰ期実習の反省会	第Ⅰ期実習の反省と課題を整理する
9. 教育実習(第Ⅱ期)のガイダンス	第Ⅱ期実習の目的と内容、責任実習と指導案について
10. 模擬実習Ⅰ	先生・子ども・記録と評価の観点で模擬実習とその振り返りを行う
11. 模擬実習Ⅱ	(同上)
12. 幼稚園の現場から1;「教材研究」	教育計画に関連する教材研究を行う 〈外部講師〉
13. 幼稚園の現場から2: 「現在の子どもの姿」	現在の幼稚園の子どもの様子を聞く・知る(外部講師)
14. 第Ⅱ期実習の諸事項の確認	第Ⅱ期実習の諸事項を確認する
15. 第Ⅱ期実習の反省会	第Ⅱ期実習の反省と今後の課題を整理する

Ⅴ 使用テキスト・教材等

実習のてびき　本学配布冊子
幼稚園・保育所実習パーフェクトガイド　小櫃智子 他　わかば社

Ⅵ 参考書・参考資料

幼稚園教育要領解説
幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	実習日誌	成果発表・作品	授業態度	その他(実習先評価)
配点比率(%)　合計 100		30		30	40
幼稚園の役割と機能の理解		○		○	○
子ども理解の習得		○		○	○
保育内容の具体的な理解		○		○	○
教師の役割と倫理の理解		○		○	○

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

普段から実習に必要となる準備と取り組みを行うこと。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

時間・提出物の期限を厳守すること。
遅刻及び出席状況により、実習を行うことができない場合もあるので注意のこと。

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
保育・教職実践演習（幼稚園）		〔2〕	**英保**	**2**	**竹石聖子**

Ⅰ　主題

履修カルテをもとに、自分の不足している部分や更に学びたい部分について課題を自覚し学ぶことで、2年間の学びの集大成とする。

Ⅱ　授業の到達目標

1.自分の課題に自覚的に取り組むことができる。
2.フィールドワークをもとに、観察記録や指導案等を書くことができる。
3.自分の意見を、書面、討議など様々な形で表現することができる。

Ⅲ　授業の概要

基本的には20人前後のグループに分かれての演習を行う。演習は、ロールプレイ、模擬授業などを使って実践的に進めていく。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目（全は全体Gはグループでの学び）	内　容
1.今までの学びの振り返り（全）	履修カルテをもとに学びを振り返る
2. ┐	各グループに分かれ各自の課題を追求
3. │	・課題の明確化
4. │	・フィールドワーク
5. │	・研究、調べる活動
6. ├フィールドワークを含めた学び（G）	・記録、指導案の作成
7. │	・活動の検討
8. │	・ディスカッション
9. │	・ロールプレイ・模擬授業
10. │	・幼稚園指導要領・保育所保育指針の学び
11. │	等々を含みながらそれぞれのプログラムに
12. ┘	よって進める
13.　講演（1）	障がいをもった子・親子への対応について
14.　講演（2）	保護者への対応について
15.まとめ	自分の学びをまとめる まとめは履修カルテに綴る

Ⅴ　使用テキスト・教材等

各グループで指示

Ⅵ　参考書・参考資料

履修カルテを活用する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%		20	20	20	40
自分の課題を自覚し意欲的に取り組む		○	○	○	○
学びを生かして記録・指導案等を書く		○	○	○	○
自分の意見を討論・書面等で表現する		○	○	○	○

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

自分の課題をもとに、必要に応じて授業以外の時間にも学習を進める

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

フィールドワークは大切な要素であるので、そのことを自覚して臨むこと。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
保育内容研究Ⅰ（健康）		〔1〕	**英保**	**2**	**鈴木雅裕**

Ⅰ　主題

子どもが健やかな生活を送り、個性的で活発な主体的活動を通して心身の健全な発達を実現するための適切な援助のあり方を考える。

Ⅱ　授業の到達目標

1.領域「健康」の観点から、幼児の発達の特徴が理解できる。
2.子どもの健康に関する適切な援助や指導ができる。
3.これまでに得た知識を用いて、実際的な子どもの生活や活動の場での援助できる。

Ⅲ　授業の概要

この授業では、心身の発育発達と健康の観点から、幼児の発達の特徴と発達段階に応じたかかわり方を学び、適切な援助や指導のあり方を、グループによるおたよりの作成を通して考える。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.子どもの健康とは	健康とは　健康な子ども
2.領域「健康」のねらい	養護と教育（幼稚園教育要領　保育所保育指針）
3.子どもの発育と発達（1）	形態と発達
4.子どもの発育と発達（2）	乳児期の発育と発達①
5.子どもの発育と発達（3）	乳児期の発育と発達②
6.子どもの発育と発達（4）	幼児期の発育と発達①
7.子どもの発育と発達（5）	幼児期の発育と発達②
8.安全生活と保育者のかかわり（1）	安全についての指導・援助①
9.安全生活と保育者のかかわり（2）	安全についての指導・援助②
10.安全生活と保育者のかかわり（3）	安全についての指導・援助③
11.基本的生活習慣の形成と保育者のかかわり(1)	食事　排泄　睡眠
12.基本的生活習慣の形成と保育者のかかわり(2)	清潔習慣　衣服の着脱　生活リズムの確立
13.運動あそびと保育者のかかわり	運動あそびの指導・援助
14.保育の計画と指導案	指導計画の実際
15.まとめ	全体のまとめ

Ⅴ　使用テキスト・教材等

＜ねらい＞と＜内容＞から学ぶ　保育内容・領域　健康　　清水将之・相樂真樹子　　わかば社　　2015

Ⅵ　参考書・参考資料

参考文献は、授業の中で随時紹介する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他( )
配点比率(%)　合計 100	40	10	10	40	
領域「健康」の観点からの発達理解	○		○	○	
健康に関する指導援助の方法理解	○		○	○	
健康に関する援助の実践（教育実習等）		○	○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

学習したことを含め、自身の日常生活においても基本的生活習慣の実践に心掛ける。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業と関係のない私語およびスマートフォンの使用は厳禁とする。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
保育内容研究Ⅱ（人間関係）		〔1〕	**保**	**2**	**竹石聖子、八木いくみ**

Ⅰ　主題

子どもの発達を「人間関係」の視点から理解し、「人とかかわる力」を育てる保育についての理解を深める。

Ⅱ　授業の到達目標

1.領域「人間関係」について理解する。
2.子どもの発達を、領域「人間関係」の観点から捉えることができる。
3.人とかかわる力、協同する力を育てる保育内容について考察できる。

Ⅲ　授業の概要

以下の項目について、専門知識の復習及びそれを生かした事例検討をする。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. 保育内容「人間関係」の意義	「人と関わる力」の現代的課題
2. 子どもの発達と家族	子どもを取り巻く家族の役割
3. 0歳から3歳未満児の世界―保育者と	未満児の発達の理解
4. 3歳児の世界―集団生活へ	3歳児の発達の理解
5. 4歳児の世界―仲間と一緒	4歳児の発達の理解
6. 5歳児の世界―仲間との協同へ	5歳児の発達の理解
7. 「人間関係」を育む保育	「人とかかわり力」と保育内容
8. 自我の芽生えと他者への気付き	自我と他者意識の育ちについて
9. 遊びと生活の中で	遊びと生活を通したかかわり
10. トラブルを通して	トラブルの中で育つこととは
11. 道徳性の芽生え	幼児にとっての道徳
12. 協同する経験を重ねる	協同性を育てるとは
13. 特別なニーズをもつ子ども	特別なニーズをもつ子どもとは
14. 小学校との連携	幼小の連携を考える
15. まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

保育内容　人間関係　　友定啓子・小田豊編著　　光生館

Ⅵ　参考書・参考資料

授業内で配布する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50	15	20	15	
領域「人間関係」の理解	○	○	○	○	
子どもの発達の理解	○	○	○	○	
保育内容の理解と考察	○	○	○	○	
保育内容の事例検討の発表			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

教科書の該当箇所をよく読むこと

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業に関係のない私語はしないこと。グループ討論などは積極的に参加すること。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
保育内容研究Ⅲ（環境）		**〔1〕**	**英保**	**2**	**加藤寿子**

Ⅰ 主題

この授業では、領域「環境」について学び、子どもを取り巻く環境を理解する。

Ⅱ 授業の到達目標

1.子どもの発達と環境とのかかわりについて理解する。
2.領域「環境」のねらいと内容を理解する。
3.物的・空間的環境の構成について具体的に考えることができる。

Ⅲ 授業の概要

「環境」にかかわる子どもの発達や保育について、個々あるいはグループで検討し、発表・意見交換するなどして、理解を深める。

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1.領域「環境」について	幼稚園教育要領・保育所保育指針
2.人間の生活と環境	環境の主体と要素
3.子どもと園の環境	子どもを主体とする環境とは
4.子どもの発達と環境とのかかわり①	乳児期の発達と環境について
5.子どもの発達と環境とのかかわり②	幼児期の発達と環境について
6.子どもの発達と環境とのかかわり③	幼児期の発達と環境について
7.「ねらい」及び「内容」について	幼稚園教育要領・保育所保育指針
8.環境をつくるA	物を扱う①
9.環境をつくるA	物を扱う②
10.環境をつくるB	生物を知る①
11.環境をつくるB	生物を知る②
12.環境をつくるC	文字と数①
13.環境をつくるC	文字と数②
14.環境構成と保育者の役割	保育者の役割について学ぶ
15.領域「環境」のこれから	環境における課題について
定期試験	筆記試験

Ⅴ 使用テキスト・教材等

〈新訂〉子どもと環境　中沢和子　萌文書林　2008

Ⅵ 参考書・参考資料

幼稚園教育要領　フレーベル館
保育所保育指針　フレーベル館

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　）
配点比率(%)　合計 100%	50		30	20	
子どもの発達と環境の理解	○		○	○	
領域「環境」の理解	○		○	○	
環境構成の理解	○			○	

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

テキストを事前に読んでおくこと。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

特になし

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
保育内容研究Ⅳ（ことば）		〔1〕	**英保**	**2**	**井上知香**

Ⅰ　主題

子どものことばの育ちとそれを支える環境（保育者、児童文化財等）について、様々な保育実践の知を知りながら、自らの実習体験をもとにして学ぶ。

Ⅱ　授業の到達目標

1.乳幼児期のことばの育ち（の道すじ）について理解する。
2.領域「言葉」のねらい・内容について理解する。
3.子どものことばの育ちを支える保育者の在り方について理解する。

Ⅲ　授業の概要

子どものことばの育ちと、保育所保育指針・幼稚園教育要領における領域「言葉」のねらい・内容について理解したうえで、事例を通して子どものことばの育ちを支える保育者の在り方・子ども同士のかかわり・環境構成などについて具体的に学ぶ。子どもにとってのことば、大人にとってのことばについて改めて考えることを通して保育援助を考える。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. コミュニケーションの発達	乳児期の言葉の機能の理解
2. 領域「言葉」について	領域「言葉」のねらい・内容
3. ことばの育ち（1）	乳児（0～2歳）前言語期の発達
4. ことばの育ち（2）	幼児（3～6歳）話し言葉の発達
5. 保育の中のことば（1）	ことばになる前の体験や思い
6. 保育の中のことば（2）	自分の気持ちを表すことば
7. 保育の中のことば（3）	保育者の言葉について
8. 保育の中のことば（4）	保育者としての感性に言葉を重ねる
9. 保育と児童文化財（1）	絵本の中のことば
10. 保育と児童文化財（2）	演習
11. 保育と児童文化財（3）	物語の必要性について
12. 保育と児童文化財（4）	物語の必要性について（2）
13. ことばの育ちを支える保育者の在り方	実習のエピソードから考える
14. 諸外国の保育実践	子どもが語る実践について
15. まとめ	まとめ

Ⅴ　使用テキスト・教材等

保育内容言葉　　徳安敦・堀科　編著　　青踏社　　2016
幼稚園教育要領解説
保育所保育指針解説書
幼保連携型認定こども園教育・保育要領

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	50		30	20	
ことばの育ちの理解	○		○	○	
領域『言葉』の理解	○		○	○	
ことばの育ちを支える保育者の在り方の理解	○		○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

実習や日常生活の中で、子どものことばに耳を傾ける機会を意識的に持ったり児童文化財に触れる機会持つこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
保育内容研究Ⅴ（表現Ａ）		〔2〕	**保**	**1**	**遠藤知里、田村元延、花岡清美**

Ⅰ　主題

子どもの発達を「健康・人間関係・環境・言葉・表現」の5領域の観点から捉え、子ども理解を深めながら保育内容について学ぶ。また、養護と教育にかかわる保育の内容が、それぞれに関連性を持ち、総合的に保育を展開していくための知識、技術、判断力を習得する。本授業では特に、子どもの多様な表現（自分の気持ちの表し方）を理解し育てていくために必要な感受性と「自分自身の表現力（感性・創造性）」を、多様な表現（音楽+造形+身体+言語の総合的活動）の体験を通して高める。その体験に基づいて、領域「表現」を窓口として保育内容の理解を深める。

Ⅱ　授業の到達目標

1.感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。
2.子どもの生活の大半を占める遊びから、表現とは何かを考察する。
3.自由な表現を相互に受容する体験を通して、子どもが安心感と安定感をもって自己を表現するための援助やかかわりを学ぶ。

Ⅲ　授業の概要

実技を中心とした演習。ワークショップ形式の授業で、多様な表現を体験する。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容	項目	内容
1. ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ	授業計画の説明・散歩	16. 環境と表現(1)	ふりかえりあらわす
2. 表現の原点(1)	自然にふれる	17. 環境と表現(2)	今ここであらわす
3. 表現の原点(2)	体験と表出・安心感	18. 環境と表現(3)	今ここであらわす
4. 表現の原点(3)	あらわすということ	19. 環境と表現(4)	今ここであらわす
5. 表現の原点(4)	五感をつなげる	20. 環境と表現(5)	今ここであらわす
6. 表現の原点(5)	5領域と身体性	21. 環境と表現(6)	今ここであらわす
7. 表現の原点(6)	自然と自己	22. 環境と表現(7)	今ここであらわす
8. 表現の原点(7)	つながる身体	23. 環境と表現(8)	今ここであらわす
9. 表現の原点(8)	響く身体	24. 環境と表現(9)	他者に伝える（発表）
10. 表現の原点(9)	つたわる身体	25. 対話と表現(1)	ﾚｯｼﾞｮｴﾐﾘｱの実践
11. 表現の原点(10)	感じる身体	26. 対話と表現(2)	対話的保育と協同性
12. 表現の原点(11)	あらわす身体	27. 対話と表現(3)	協同性と環境
13. 表現の原点(12)	つたえる身体	28. プロジェクト(1)	体験の連続性と表現
14. 表現の原点(13)	身体と表現	29. プロジェクト(2)	体験の連続性と表現
15. まとめ	体験と学びをふりかえる	30. まとめ	体験と学びをふりかえる

Ⅴ　使用テキスト・教材等

使用しない。

Ⅵ　参考書・参考資料

授業時に指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小レポート	活動過程と交流（成果発表）	授業態度	その他（貢献度）
配点比率(%)　合計 100		30	30	30	10
感じたことや考えたことを自分なりに表現する			○	○	○
表現とは何かについての考察		○	○	○	○
子どもが安心感と安定感をもって自己を表現するための援助やかかわりを学ぶ			○	○	○

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各教員が授業時に指示する。
普段から、すぐれた表現に積極的にふれてほしい。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

3 名の教員による授業を交互に行い、計 30 回の通年授業とする。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
保育内容研究Ⅴ（表現Ｂ）		**〔1〕**	**保**	**2**	**加藤明代**

Ⅰ　主題

これまでの表現系授業で培った「表現」の理解や技能を基盤に、「子どもの多様な表現」を支えていく土台となる「学生自身の感性・表現力」を様々な活動を通して一層高めながら、「表現」とは人や物との関わりを通してより育まれ深められていくことを学んでいく。

Ⅱ　授業の到達目標

1.自分自身の感性・創造性を磨き、表現する喜びを実感できる。
2.表現を多様な視点で捉え、能動的に活動に取り組むことができる。
3.互いの表現を交換し合い、刺激し合って高めていくことができる。

Ⅲ　授業の概要

音楽的表現と身体的表現を中心に、幾つかのテーマを演習形式で進める。また特色ある音楽教育について取り上げ、講義と演習を通して、援助・指導の在り方を探る。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目		内　容
1.	オリエンテーション		授業の流れ、意義などの説明
2.	遊ぶ・かかわる・表現するⅠ	(1)	声を手掛かりに
	―音楽的表現活動とのかかわりで―		
3.	同上	(2)	ことばのリズム
4.	同上	(3)	身近なものを使って
5.	外国の音楽教育に学ぶ	(1)	オルフ、ダルクローズ等から学ぶ
6.	同上	(2)	(同上)
7.	遊ぶ・かかわる・表現するⅡ	(1)	イメージを広げて
	―身体的表現活動とのかかわりで―		
8.	同上	(2)	(同上)
9. ～13.	総合的な表現の在り方を考える		グループごとに課題発表に向けて準備を進める
	グループ演習		
14.	発表		課題の発表
15.	まとめ		まとめ、レポート提出

Ⅴ　使用テキスト・教材等

必要に応じて資料を配布する。

Ⅵ　参考書・参考資料

実践しながら学ぶ　子どもの音楽表現　　石井玲子　編著　　保育出版社
最新　楽しい表現運動・ダンス　　村田芳子　編著　　小学館

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テストレポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　）
配点比率(%)　合計 100%		30	40	30	
自分自身の感性・創造性を磨き、表現する喜びを実感できる			○	○	
表現を多様な視点で捉え、能動的に活動に取り組む		○	○	○	
互いの表現を交換し合い、刺激し合って高めていく			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

授業内容に対する気づきや感想は各自でまとめておくこと。(授業内に時間が持てないこともある)

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

髪をしばり、動きやすい服装(スカート類,ストッキングの着用は避ける,)で受講すること。
扱う内容は前後する場合がある。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
保育内容総論		**〔1〕**	**保**	**1**	**井上知香、八木いくみ**

Ⅰ 主題

この授業では、幼稚園・保育所・認定こども園で行われている保育内容の構造について学ぶ。
「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」における 5 領域を理解した上で、更に今日的な諸問題についても学んでいく。

Ⅱ 授業の到達目標

1.幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園それぞれの保育内容の特徴を理解できる。
2.保育の様々な場面を保育内容という視点から考察できる。
3.5 領域を総合的に保育することを理解し指導案を立てることができる。

Ⅲ 授業の概要

幼稚園教育要領・保育所保育指針をもとに、実際の保育の中の内容について考察する。

Ⅳ 授業計画と内容

	項目	内容
1.	保育内容総論で何を学ぶか	子どもの理解と保育内容
2.	保育内容の捉え方とその背景	保育内容の歴史的変遷について
3～4.	保育内容の捉え方	幼稚園教育要領・保育所保育指針の理解 幼稚園・保育所・小学校の内容比較
5.	「遊び」の中の保育内容	遊びを 5 領域という視点から考える
6.	「生活」の中の保育内容	養護と教育の一体化について考える
7.	「環境」の中の保育内容	子どもの成長を促す環境構成から考える
8.	「行事」の中の保育内容	行事に含まれる保育内容を考える
9.	子どもの「発達」と保育内容(1)	発達という視点から見た保育内容
10.	子どもの「発達」と保育内容(2)	発達という視点から見た保育内容
11.	保育者の専門性とは	実習や今までの学びから専門性について考える
12～14.	保育の展開と保育内容	乳児(0,1,2 歳児)及び幼児(3,4,5 歳児)の保育内容の作成
15.	保育内容に関する今日的課題	幼保小の連携について アプローチカリキュラムからスタートカリキュラム

Ⅴ 使用テキスト・教材等

演習　保育内容総論　　金澤妙子　佐伯一弥　　建帛社

Ⅵ 参考書・参考資料

幼児教育の原則　　無藤　隆　　ミネルヴァ書房
保育の学校　1～3 巻　　無藤　隆　　フレーベル館
幼稚園教育要領解説　ほか

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	50	10	30	10	
様々な保育場面における保育内容の理解	○	○		○	
保育内容の総合性についての理解	○	○		○	
保育内容を考慮した保育内容の作成	○	○		○	

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

自主実習・本実習での経験を授業に活かせるように記録しておくこと。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

演習科目なので自分の考えをもって意欲的に授業に参加するよう努める。自分なりの保育観を深めてください。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
保育方法論		**2**	**保**	**1**	**加藤寿子**

Ⅰ　主題

この授業では、事例をもとに子どもの内面について考え、子ども理解を深める。

Ⅱ　授業の到達目標

1.子どもについて考え、子ども理解を深める。
2.保育の仕組みを学び、保育に対する理解を深める。
3.保育者の役割を学び、さまざまな援助について考えを持つ。

Ⅲ　授業の概要

実際の子どもの姿を想像しながら、保育の仕組みや内容など基本的な考え方を学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.保育方法とは	保育の位置づけについて学ぶ
2.保育の目的と内容	保育の目的とは何か考える
3.保育の仕組み	保育を支える要素について
4.子どもの発達と遊び	子どもと遊びの関係を学ぶ
5.子どもの発達と生活	子どもと生活の関係を学ぶ
6.子どもを取り巻く環境	保育環境を構成するとは
7.保育の形態	多様な保育形態を考える
8.保育者の援助の方法	具体的な援助方法について1
9.保育者の援助の方法	具体的な援助方法について2
10.保育と計画	園生活の見通しと保育の展開
11.保育と記録	記録から援助を考える
12.保育者の役割	子どもを理解するとは何か
13.保育者の役割	子どもを理解するとは何か
14.園生活の充実	生活の充実に向けた援助
15.教材研究	情報機器および教材の活用
定期試験	筆記試験

Ⅴ　使用テキスト・教材等

保育方法の実践的理解　　久富陽子・梅田優子編著　　萌文書林　　2011

Ⅵ　参考書・参考資料

幼稚園教育要領　　文部科学省　　フレーベル館　　2008
保育所保育指針　　厚生労働省　　フレーベル館　　2008

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	60	10		30	
子どもについての理解	○	○		○	
保育の仕組みに関する理解	○	○		○	
保育者の役割と援助に関する理解	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

テキストを事前に読んでおくこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

特になし

授業科目名	単位数		学科	年次	担当教員
	必修	選択			
子ども学概論	**2**		**保**	**1**	**竹石聖子**

Ⅰ 主題

この科目は、フィールドワークでの気付きを、自分の言葉で表現し、他者の意見も聞くことにより、自分の保育の基盤をつくることを目標とする

Ⅱ 授業の到達目標

1.保育現場で学ぶ際に心がける点を理解した上でフィールドワークに取り組める。
2.見学実習で見てきたことを自分なりに記録に表現できる。
3.実習での体験をもとに、保育についての考察や理解ができる。

Ⅲ 授業の概要

フィールドワークを活かし、実践と理論の両面から理解をすすめる。

Ⅳ 授業計画と内容

学年をABC,DEFの2グループに分け、講義と保育現場での保育の観察を交互に行っていく。
観察でのレポートを講義の中で活用したり、それをもとに討論を行ったりする。

項目	内容
1.「子ども学概論」で何を学ぶか	本科目の趣旨説明
2. 観察実習とは	観察実習の目的と方法、諸注意
3.「子ども」とは	これから出会う子どもたち
4. 現代の子ども事情1(ABC)	子どもにとっての遊びの意義
5. 現代の子ども事情1(DEF)	子どもにとっての遊びの意義
6. 現代の子ども事情2(ABC)	保育所・幼稚園における子ども
7. 現代の子ども事情2(DEF)	保育所・幼稚園における子ども
8. 現代の子ども事情3(ABC)	危機に立つ子ども
9. 現代の子ども事情3(DEF)	危機に立つ子ども
10.現代の子ども事情4(ABC)	子どもを理解することとは
11.現代の子ども事情4(DEF)	子どもを理解することとは
12.社会の中の子ども(1)	子育て支援の現場から
13.社会の中の子ども(2)	福祉の現場から
14.再び「子ども」について考える	子どもへの理解を深める
15.まとめ	自分の学びをまとめ最終レポート作成

Ⅴ 使用テキスト・教材等

特になし。必要に応じて資料配付

Ⅵ 参考書・参考資料

新聞の記事等で、子どもに関する話題を読む。

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他(フィールドワーク)
配点比率(%) 合計 100%		40		30	30
フィールドワークへ自覚的に取り組む				○	○
記録の内容 及びまとめる上での工夫		○		○	○
実習体験を省察し次回の実践に活かす		○		○	○

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

新聞の記事に関心を持って読む。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

特にフィールドワークでは遅刻厳禁。また、レポート提出も期限を守る。

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
モンテッソーリ教育概論		**2**	**保**	**1**	**松浦公紀**

Ⅰ　主題

モンテッソーリ教育の内容を広く知り、その重要性と必要性を学ぶ。

Ⅱ　授業の到達目標

1.乳幼児期の子どもの姿を先入観なく見る姿勢を身に付ける
2.乳幼児期の子どもの成長・発達を知る。
3.モンテッソーリ教育の概要を知る。

Ⅲ　授業の概要

DVD 視聴後にパワーポイントを用いて理論講義で進行する。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. 現代社会と子ども①	社会状況と子どもの育ちの関係。
2. 現代社会と子ども②	子どもを取り巻く環境の劣化
3. 胎児期から出生までの育ち	現代科学が解明した胎児の能力
4. 乳児期の育ちの順番	0 歳～3 歳の発達の課題
5. 幼児期の育ちの順番	3 歳～6 歳の発達の課題
6. 自己教育力	主体性、自発性の捉え方
7. 敏感期	自己教育力の具体的な表れ、発達課題
8. 環境論	環境が子どもに与える影響
9. 教師論	乳幼児期における教師のあり方
10.モンテッソーリ教育の 5 分野	敏感期を背景とした教育分野
11.教具と用具	物的環境としての用具と教具の紹介
12.提示について	子どもと環境をつなぐ提示の意味
13.現場での子どもの活動のサイクル	どのように子どもは自立していくか
14.マリア・モンテッソーリの生涯①	映像によるモンテッソーリの生涯
15.マリア・モンテッソーリの生涯②	像によるモンテッソーリの生涯

Ⅴ　使用テキスト・教材等

モンテッソーリ教育が見守る子どもの学び　　松浦公紀　　学研　　2004

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	60	10	10	20	
モンテッソーリ教育理論の理解	○				
敏感期の理解		○			
活動の系統性の理解			○		
質問や討論への参加				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

テキストの『モンテッソーリ教育が見守る子どもの学び』を予習、復習として読んでおくこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

履修上の注意：一方的な知識の伝授ではなく、両方向のやり取りでの授業の進行を期待する。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
モンテッソーリ・メッソードⅠ		**〔1〕**	**保**	**1**	**松浦公紀**

Ⅰ 主題
この授業ではモンテッソーリ教育の基盤である『日常生活の練習』の理論と実技を学ぶ。

Ⅱ 授業の到達目標
1.日常生活の練習の目的を知る。
2.日常生活の練習を構成するさまざまな活動をを知る。
3.一つ一つの活動の掲示の方法を知る。

Ⅲ 授業の概要
DVD 視聴後にパワーポイントや用具を使っての実技を中心とした授業。

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1. 5 分野での日常生活の練習の位置付け	運動と自立の関係の考察
2. 運動の敏感期とは	運動に対する外面的表れ
3. 日常生活の練習の分野	運動の対象としての領域解説
4. 日常生活の練習の用具	活動の対象としての教材類の紹介
5. 日常生活の練習の用具の提示	分析された提示方法
6. 基本運動の活動の提示①	具体的な子どもへの提示の紹介
7. 基本運動の活動の提示②	具体的な子どもへの提示の紹介
8. 社交的なふるまいの提示	具体的な子どもへの提示の紹介
9. 環境への配慮の提示①	具体的な子どもへの提示の紹介
10.環境への配慮の提示②	具体的な子どもへの提示の紹介
11.環境への配慮の提示③	具体的な子どもへの提示の紹介
12.自己への配慮の提示①	具体的な子どもへの提示の紹介
13.自己への配慮の提示②	具体的な子どもへの提示の紹介
14.運動の調整の提示	線上歩行と静粛練習について
15.活動の系統性の理解	運動の獲得の順番の理解

Ⅴ 使用テキスト・教材等
モンテッソーリ教育が見守る子どもの学び　松浦公紀　学研　2004

Ⅵ 参考書・参考資料
毎回配布する提示に関する資料。

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　）
配点比率(%) 合計 100%	50	20		30	
日常生活の練習理論の理解	○	○			
運動の敏感期の理解	○	○			
活動の系統性の理解		○			
質問や討論への参加				○	

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）
配布される資料とテキストによる毎回紹介される提示の復習

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）
履修上の注意：実技が中心になるので欠席することの内容に留意する。
前提条件：モンテッソーリ教育概論を履修しての受講であること。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
モンテッソーリ・メッソードⅡ		**〔1〕**	**保**	**2**	**松浦公紀**

Ⅰ　主題
この授業では全ての教育の基礎である『感覚教育』の理論と実技を学ぶ。

Ⅱ　授業の到達目標
1.感覚教育の目的を知る。
2.感覚教育の意義を知る。
3.感覚教育の操作方法を知り、掲示の方法を知る。

Ⅲ　授業の概要
DVD 視聴後にパワーポイントや用具を使っての実技を中心とした授業。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. 感覚教育の変遷	モンテッソーリ感覚教育の意義
2. 感覚の敏感期とは	五感の刺激に対する外面的表れ
3. 感覚と感覚器官	感覚教育の用語の説明
4. 感覚教育の教具	活動の対象としての感覚教具の紹介
5. 感覚教具の提示	感覚を孤立した分析された提示方法
6. 視覚教具の提示①	具体的な子どもへの提示の紹介
7. 視覚教具の提示②	具体的な子どもへの提示の紹介
8. 視覚教具の提示③	具体的な子どもへの提示の紹介
9. 触覚教具の提示①	具体的な子どもへの提示の紹介
10.触覚教具の提示②	具体的な子どもへの提示の紹介
11.触覚教具の提示③	具体的な子どもへの提示の紹介
12.聴覚教具の提示	雑音筒と音感ベルについて
13.嗅覚教具の提示	嗅覚筒について
14.味覚教具の提示	味覚びんについて
15.感覚教育の先	感覚教育を土台とした知的活動

Ⅴ　使用テキスト・教材等

モンテッソーリ教育が見守る子どもの学び	松浦公紀	学研	2004
モンテッソーリで育つ！自分で考える子ども	監修　松浦公紀	学研	2013
モンテッソーリの子育て　おとなが子どもにできること	監修　松浦公紀	学研	2013
モンテッソーリの子育て　子どもの力を引きだす環境	監修　松浦公紀	学研	2013

Ⅵ　参考書・参考資料
毎回配布する提示に関する資料。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	50	20		30	
感覚教育理論の理解	○	○			
感覚の敏感期の理解	○	○			
活動の系統性の理解		○			
質問や討論への参加				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
配布される資料とテキストによる毎回紹介される提示の復習

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
履修上の注意：実技が中心になるので欠席することの内容に留意する。
前提条件：モンテッソーリ教育概論を履修しての受講であること。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
レクリエーション論		**2**	**保**	**1**	**田井中正志**

Ⅰ 主題

現代社会が抱える 21 世紀の課題をふまえ、保育や地域に密着した課題を念頭に置きながら、レクリエーションがその課題解決にどのような役割を果たすのかを理解する。また教育者という立場からのレクリエーション支援者の役割・支援方法の基礎理論を学ぶ。

Ⅱ 授業の到達目標

1.レクリエーション支援に対する理解を深め、支援できる能力を身につける
2.保育の現場にてレクリエーションを活用出来る実践能力を身につける
3.(公財)日本レクリエーション協会公認資格　レクリエーション・インストラクター取得が出来る

Ⅲ 授業の概要

レクリエーションに関する基礎理論を学び、社会におけるレクリエーションの役割と必要性を理解する。レクリエーションの支援の内容や手法について学習することにより、実際の保育の現場においてレクリエーションを上手に活用できる人材を育成する。出来る限り、毎回実習を取り入れながら、レクリエーションの楽さを理解しながら授業を進める

Ⅳ 授業計画と内容

この授業は、公益財団法人　日本レクリエーション協会公認資格レクリエーション・インストラクター養成カリキュラムに基づき下記の項目・内容にて進める。

項目	内容
1. レクリエーション基礎理論	ガイダンス・レクリエーションの意義
2.	レクリエーションの意義
3.	レクリエーション運動を支える制度
4.	レクリエーション運動を支える制度
5.	レクリエーション・インストラクターの役割
6. レクリエーション支援論	ライフスタイルとレクリエーション
7.	ライフスタイルとレクリエーション
8.	高齢社会の課題とレクリエーション
9.	少子化の課題とレクリエーション
10.	地域とレクリエーション
11. コミュニケーションワーク	グループワークトレーニング
12. レクリエーション事業論	レクリエーション事業とは
13. (保育の中でのイベント)	レクリエーション事業とは
14.	事業計画
15.	レクリエーション活動の安全管理
定期試験	

Ⅴ 使用テキスト・教材等

「レクリエーション支援の基礎」 楽しさ・心地よさを生かす理論と技術　(財)日本レクリエーション協会編

Ⅵ 参考書・参考資料

必要に応じで資料、レジュメを配布する。

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他 ( )
配点比率(%)　合計 100	60	20	5	15	
楽しさ・生きがづくりの理解	○	○	○	○	

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

テキスト「レクリエーション支援の基礎」楽しさ・心地よさを生かす理論と技術を事前に読んでおくこと。また、インターネット・新聞等を読んで社会の動きを知り、社会とレクリエーションの関わりについて関心をもっておくこと

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

授業中積極的な質問等発言歓迎

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
レクリエーション援助法		〔1〕	**保**	**2**	**遠藤知里**

Ⅰ　主題

現代社会における「レクリエーション」の意味を実践を通して理解し、具体的な援助方法を学ぶ。

Ⅱ　授業の到達目標

1.アクティビティを体験し、指導法を工夫して、他者にその楽しさを伝えることができる。
2.地域におけるレク活動への参加を通してその実際を理解し、その意味を考察できる。
3.対象に合ったレクリエーションプログラムを企画し、指導・運営することができる。

Ⅲ　授業の概要

実践を中心とした授業構成になっています。グループワークを通して、多くの人と交流しましょう。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. コミュニケーション・ワーク	アイスブレーク
2. コミュニケーション・ワーク	ホスピタリティトレーニング
3. コミュニケーション・ワーク	アイスブレーク(実習)
4. コミュニケーション・ワーク	アイスブレーク(実習)
5. 目的にあわせたレク・ワーク	目的に沿ったアクティビティの選択
6. 目的にあわせたレク・ワーク	アクティビティの展開方法
7. 目的にあわせたレク・ワーク	アクティビティの展開方法
8. 目的にあわせたレク・ワーク	アクティビティの展開方法(実習)
9. 目的にあわせたレク・ワーク	アクティビティの展開方法(実習)
10.対象にあわせたレク・ワーク	対象に合わせたアレンジ法
11.対象にあわせたレク・ワーク	相互作用の活用方法
12.対象にあわせたレク・ワーク	対象に合わせたレク事業の企画
13.対象にあわせたレク・ワーク(後期)	対象に合わせたレク事業の運営
14.対象にあわせたレク・ワーク(後期)	対象に合わせたレク事業の運営
15.まとめ(後期)	体験をまとめる　レク資格申請手続き

(13、14、15 回目授業は後期に実施。日時と場所は掲示する。)
(レクリエーション演習の予定) 新入生歓迎会:2016 年 4 月 16 日(土)、ｵｰﾌﾟﾝｷｬﾝﾊﾟｽ:2016 年 3 月 19 日(土)、Go!Rec!(5レク・1年生に伝える会):後期

Ⅴ　使用テキスト・教材等

レクリエーション支援の基礎　日本レクリエーション協会(1 年次に使用したものと同じです)　日本レクリエーション協会

Ⅵ　参考書・参考資料

授業で提示します。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小レポート	指導実習	授業態度	その他(貢献度)
配点比率(%)　合計 100		20	30	40	10
アクティビティ指導の技術			○	○	○
地域におけるレク活動の理解		○		○	
レクリエーションプログラムの企画運営			○	○	○

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

レク支援現場実習(地域でのレク活動に参加。合計 9 時間以上。)
半日は1回3時間、全日は1回6時間でカウントします。主催者確認印(黄色カード)と、レポート提出が必要。
レク演習(主に学内でのレク活動の企画運営に参加。7.5 時間以上の指導実習を含む。)
新入生歓迎会(必須)は 4.5 時間、1 年生に伝える会(必須)は 1.5 時間、パパママ応援団、オープンキャンパスは 1.5 時間でカウントします。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

変則的な授業日程になっているので予定を確認してください。現場実習(9 時間以上)、レク演習(7.5 時間以上)を含めて、単位を認定します。なお、今年度は授業の一部を集中授業で実施します。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
子どものフィールドワーク		**〔1〕**	**保**	**1**	**藤田庄治**

Ⅰ 主題

この授業は、子どもの自然教育で注目されている環境教育プログラム〝ネイチャーゲーム〟の公益社団法人日本シェアリングネイチャー協会公認リーダー資格取得集中講座である。

Ⅱ 授業の到達目標

1.自然への直接体験を通してネイチャーゲームの理念を学び、幼児期における自然教育を考察できるようになる
2.自然教育の基礎的な知識を学ぶことによって幼児の野外遊びに応用できる
3.ネイチャーゲームリーダーの資格取得を目指す。

Ⅲ 授業の概要

この授業は、規定の実習と講義を受講後、指導実習及び検定を実施。合格者は任意で申請し、資格取得となる。※3 日間での集中講座(駿府公園・常葉学園短期大学講義室)

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1. 実習 1	アクティビティ 1〜5
2. 講義 1	ネイチャーゲームの概要
3. 講義 2	ネイチャーゲームリーダーの役割・理念
4. 講義 3	ネイチャーゲームの実践法
5. 実習 2	アクティビティ 6〜10
6. 講義 4	安全対策
7. 講義 5	自然への配慮
8. 講義 6	指導員制度の概要
9. 講義 7	KYT トレーニング
10. 講義 8	指導計画書作成
11. 指導実習	アクティビティ指導実習
12. 実習 3	アクティビティ 11〜13
13. 講義 9	ネイチャーゲーム 1 を読む
14. 講義 10	自然体験活動の理念
15. まとめ・検定(筆記試験)	これまでの内容の振り返り・検定

Ⅴ 使用テキスト・教材等

課程認定校ネイチャーゲームリーダー養成講座テキスト　公益社団法人日本シェアリングネイチャー協会

Ⅵ 参考書・参考資料

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他 ( )
配点比率(%)　合計 100	40	10	20	30	
幼児期における環境教育の重要性	○	○		○	
ネイチャーゲーム・自然体験活動理念の理解	○	○		○	
ネイチャーゲームの知識及び指導技術	○		○		

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

最終日に検定があるので、学習内容を復習しておくこと。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

履修時の注意 ： リーダー養成講座受講料及び合格者は登録料要する。
※詳細は〝ネイチャーゲームリーダー養成講座募集要項〟を一読。

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
児童館・放課後児童クラブの機能と運営		**2**	**保**	**1**	**鈴木久美子**

Ⅰ　主題

この授業では児童福祉の基本理念である「健全育成」の考え方を理解するとともに、現代の子どもをとりまく環境について、その現状と課題について学ぶ。また、地域において「遊びを通じて子どもを育成する」ことの役割をもつ児童館・放課後児童クラブの機能を理解する。

Ⅱ　授業の到達目標

1.健全育成の考え方、具体的内容、現代におけるその課題について説明することができる。
2.児童館の概要、役割について学び、地域に根ざした児童館の重要性について考察できる。
3.放課後児童クラブの概要、役割について学び、その課題と展望について考察できる。

Ⅲ　授業の概要

児童福祉法に盛り込まれた「健全育成」の考え方、その具体的内容、現代の子どもの健全育成上の課題、遊びの健全育成上の意義について整理する。そのうえで、この理念を地域で具現化する児童館・放課後児童クラブの機能と運営について、具体的な事例を紹介しながら理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.児童館・放課後児童クラブと子どもの健全育成	遊びを通じて子どもを健全育成するということ
2.児童福祉法の理念と健全育成	児童福祉法に盛り込まれた健全育成の考え方
3.健全育成の内容と意味	その具体的な内容と意味
4.児童館・放課後児童クラブの変遷	その源流から現状
5.児童館・放課後児童クラブの概要	その概要と特性
6.児童館に求められる機能　①	児童館ガイドラインの内容
7.児童館に求められる機能　②	児童館の機能
8.放課後児童クラブ	放課後児童クラブガイドラインと改定後の基準
9.運営管理	子どもの権利擁護や要望・苦情への対応
10.安全対策	こどもの安全と安心な地域づくり
11.環境構成	環境構成の事例
12.子育て支援	乳幼児とその保護者に対する支援
13.気になる子どもへの支援	障がい児や家庭環境に問題のある子どもへの支援
14.職場倫理	児童厚生員・放課後児童指導員に求められること
15.これからの児童館・放課後児童クラブ	その課題と展望

Ⅴ　使用テキスト・教材等

児童館論　　財団法人　児童健全育成推進財団　　2015

Ⅵ　参考書・参考資料

児童館論　　一般財団法人　児童健全育成推進財団　　2015

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他（　　）
配点比率(%)　　合計 100	60	20	20		
健全育成についての理解	○	○	○		
児童館についての理解	○	○	○		
放課後児童クラブについての理解	○	○	○		

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

次週のテーマに関するテキストをあらかじめ読んでおくこと。日頃から子どもや家庭に関するニュースを幅広くチェックし、情報を収集しておくこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

毎時間、その内容に関する理解・考察を小レポートとしてまとめ、提出してもらう。

授業科目名	単位数		学科	年次	担当教員
	必修	選択			
児童館・放課後児童クラブの活動内容と指導法		**2**	**保**	**1**	**鈴木久美子**

鈴木俊江、竹下益江、角皆冴子、永倉三枝子、奈良恵子、半田有紀

Ⅰ 主題

児童ソーシャルワークをベースとした、児童館・放課後児童クラブの日々の活動のながれとともに、行事の企画や利用者への対応、地域とのかかわり等について学び、児童館・放課後児童クラブの業務の実際を把握する。

Ⅱ 授業の到達目標

1.児童館・放課後児童クラブにおける具体的な活動と年間を通じた活動の流れを理解し、説明することができる。
2.児童館・放課後児童クラブの役割について学び、地域に根ざした施設としての重要性について考察できる。
3.健全育成を担う児童厚生員としての専門的知識を応用できるようになる。

Ⅲ 授業の概要

児童館・放課後児童クラブにおける活動の流れを理解し、その活動の具体的な実践に触れることで、遊びを通した児童の健全育成に対する理解を深める。そのうえで、子どもとのかかわり方や行事の企画等、児童館の運営手法について学び、児童厚生員の役割について把握する。

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1.児童館とは①	アイスブレイク、児童館の紹介、役割と機能
2.児童館とは②	児童厚生員の仕事の魅力
3.健全育成論と実践例	遊びを通じて子どもの発達を支援すること
4.子育て支援論と実践例	親子のふれあい・保護者同士の交流促進
5.児童厚生員の仕事と意義①	安全管理、安心できる居場所づくり
6.児童厚生委の仕事と意義②	子どもの成長を見守り支援すること
7.児童ソーシャルワークとは①	グループワークとソーシャルワーク
8.児童ソーシャルワークとは②	子どもや家庭へのきめ細やかな配慮と理解
9.放課後児童クラブとは	児童クラブにおける子どもとのかかわり方と支援
10.ボランティアと地域連携	地域の社会資源との連携、交流活動
11.子どもの遊びと発達①	子どもの欲求と遊び
12.子どもの遊びと発達②	一緒に遊ぶ・遊びを見守る・遊びを伝える・遊びを助ける
13.行事の組み立てと実践(企画)	テーマに沿った事業の企画立案
14.行事の組み立てと実践(発表)	テーマに沿った事業の企画発表
15.まとめと展望	これからの児童館

Ⅴ 使用テキスト・教材等

児童館論　財団法人　児童健全育成推進財団　2015

Ⅵ 参考書・参考資料

その都度参考文献を紹介する。

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他(　　)
配点比率(%)　合計 100	20	60	20		
児童館・児童クラブの活動の理解	○	○	○		
児童館・児童クラブの役割の理解	○	○	○		
グループワーカーとしての知識及び技術の応用	○	○	○		

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

授業中に示す課題についてレポートを作成する。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

講義を中心に授業を進めるが、グループに分かれ実技をする機会を設ける。